

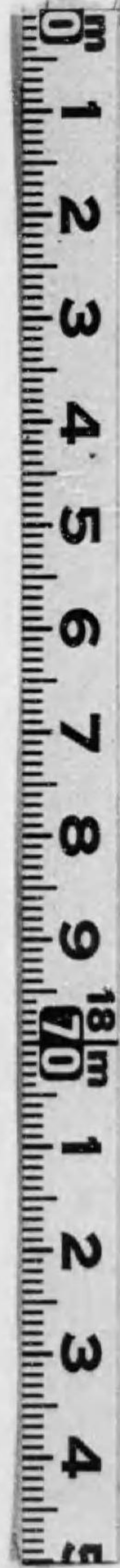
508

18

物価問題 第一回の三

小川 郷太郎

国立国会図書館



始



KI7M-38

第一回

越佐夏季大學講演集

第三輯

物價問題

法學博士 小川郷太郎

508-18



問題

京都帝國大學教授 法學博士 小川郷太郎



- 四、投機抑制論と其批判
- 五、カルテル撤廃論と其批判
- 六、中間商業除去論と其批判
- 七、配給調節論と其批判
- 八、消費税廢減論と其批判
- 九、國費節減論と其批判
- 一〇、消費節約と其批判
- 第五、結論

# 物價問題

京都帝國大學教授 法學博士 小川郷太郎



## 第一、緒言

本日から三日に亘りまして、物價問題に就て諸君の前で御話することになりました、私に取つては非常な光榮であります。既に最近の國際問題とか、思想問題とか云ふやうな、我國の現代に於ける大問題が攻究せられて居りますやうで、私の御話します物價問題は、實は日本の現在に於て、經濟の方面から見て、最も大なる問題であると思ふのであります。日本の國の興るか興らないか、榮えるか衰へるか云ふやうな大きな問題が之に引掛つて居ると思ふのであります。物價と申せば、物を製造して居る所の者も之に大なる利害關係を有つて居りますし、物を消費して居る所の者も、之に非常な利害關係を有つて居るのであります。隨て事業界が損得をするとか、或は其の結果が、國民の間に如何に分配されるか或は或る階級が富み、或る階級が貧しい、是等の事は詮し詰めれば皆な物價に歸するのであつて物價が其の中心に流れて居るのであります。それでありましてから物價は經濟界財界の總ての方面に關係を有つ

二  
のであつて、それが即ち重心點であります。物價が經濟界財界の重心點でありますから、其點を捉へる  
と經濟界の大体が讀めるのであります。でありますから私の是から御話します物價問題は、物價を中心  
として、經濟界の全体を見ることになると思ひます。物價問題と申しますれば、非常に廣い意味を持つ  
て居りますから、第一に物價とは何であるかと云ふ事を、一通り御話しなければならぬのであります。  
物價と云ふのは物の直段である、物の直段と云へば、今日の經濟社會に於ては、貨幣を以て計るのであ  
ります。コップが一個拾錢と云ふ、それがコップの直段であります、さうするとコップと云ふ物と、拾  
錢と云ふ貨幣とが相對立して居る譯であります。此の如く一つの品物に就ての物の直段も物價と云へる  
のであります。普通物價と稱して居りますのは、多くの種類の品物を、貨幣で計つた所のものであり  
ます。それで一般に物價が高いとか安いとか云ふのは、唯だ一つの品物が高いとか安いとか云ふのでな  
くして、多數の品物に就き、之に對して拂ふべき貨幣の分量が多いか少ないかと云ふことであります。  
此のコップが拾錢と云ひ、或は拾五錢と云ふ、拾錢よりは拾五錢が高い、即ち貨幣の分量で十を以て現  
はすよりは、十五で現はした方が高いのであります。是は分り切つた話であります。日本で今日問題  
となつて居る物價問題と云ふのは一つの品物ではなく、多くの品物に現はれて來た直段を見てゐるので  
あります。所が物價は時々變動する、即ち物價が騰貴し或は下落する、其の物價の變動と云ふのも多種  
多様の品物が、一体どう動くか上へ上つて行くか下へ下つて行くか、それを見て物價が上つて居るとか  
下つて居るとか申すのであります。

物價と云ふものゝ意味を申しましたが、然らば物價は。どうして定まるか、此のコップが拾錢と定まる  
のはどうして拾錢と定まるか、是が一つの問題であります。それから物價が騰落する原因は何に在るか  
何故に物價が上つたり下つたりするのであるか、此のコップが拾錢が拾五錢になる、それに従つて土瓶  
も壹圓が壹圓貳拾錢になる、さう云ふ風に上つて來るのは何故であるか、又之に反して拾錢の物が八錢  
になり、壹圓の物が八拾錢に下るのはどう云ふ譯であるか、即ち物價が如何にして決定するか、又物價  
の變動は如何なる理由に基づくかと云ふやうな事を研究するのが、一の物價の理論的研究であります。  
此事には後ちに多少入りますけれども、之を述べますと實は經濟學の非常に難かしい、込入つた理窟に  
入つて行きます。それでは諸君の感興を惹かないかと思ひますが、普通の經濟學の言葉で、さうして俗  
に能く知られて居る極く平たい言葉で申しますと、物價が決定し、物價が變動する理由は何であるかと  
云へば、是は二様に見られると思ふのであります。即ち前に申しました物價の定義に依て、物價は品物  
と貨幣との二方面であります。それでありますから物價が決定するのも物價が變動するのも、物の方面  
と金の方面、此の兩方面から働いて來るのであります。先づ金の方から申すと、金の澤山に有るとか、  
金が少いと云ふこと、又其の金を使ひたいと思ふ者が多いとか少ないとか云ふことです。俗に行はれ  
て居る言葉を藉りて言へば、社會の金に對する需要供給の關係である、もう一つ約めて言ふと金融の關  
係であります。一寸考へても分りますが、非常に澤山の金が俄に出る、今までの倍の金が出て來るとし  
ます、今まで拾錢と計つて居つた物を、拾五錢と計り貳拾錢と計り得るのであります、故に金の分量が  
澤山あると云ふことは、動もすれば物價を上げる原因となるのであります。是は固より物が同じ分量で  
存在して居ると見たのであります。金が二倍になり物が二倍になると、金と物とは同じ割合でありま

すから、物價はそんなに違はぬのでありますが、物を同じ分量として見ると、金の方の動きに依つて、物價は變つて行くのであります。次は物の方であります。物の方に於ても、物價は物の需要供給の關係で定まり又は變動する。物を欲しがる程度即ち需要が變せないので物の供給が多くなると物の値段は下るのであります。又物の供給が變せないのに物を欲しがる程度即ち需要が大になつて來ると物の價が上るのであります。需要供給の關係は、金の方にも物の方にも在るので、それが結付かつて物價が定まり物價が變動するのであります。此の理窟を説きますれば随分時間が掛りますが、後に又引用することとして、此所では極く簡單に物價の決定し、物價の變動すると云ふこと、需要供給の理法に依る、其の需要供給は、金の方と物の方と兩方見なければならぬと云ふことを申して置くに止めます。其需要供給は何に依つて決定するかと云ふことは、物價論を一步進めることになりまされども、是は此際措くことに致します。

次の問題は現在、我々の社會に於て物價はどうか、物價はどうか云ふ風に動いて居るか、物價はどうか云ふこととあります。是は物價の具體的研究になるのである、我々の經濟生活は、廣くいへば日本の財界は、物價がどうなつて居るか、物價がどんなに變動して居るか云ふことに依て、非常に影響される譯であります。それでありませうから我國の現在に於ける物價の状態如何、物價の變動如何と云ふことは我々の現實社會に於て最も必要な研究となるのであります。財界がどういふ風になつて行くか、我々國民全体の生活は安定するか經濟上の繁榮は之を期することが出来るかと云ふ様なことは實際物價がどうなつてゐるかといふことを研究するに依て、判斷することが出来るのであります。私が此所で諸君と

共に研究しやうとする所の物價問題は、今私が申しましたやうな事を總て論ずると時間が足りない、茲に『物價問題』と云ふ題目を出されました當局者は、如何なる事を期待して居られますか私能く存じませぬ。併ながら今日日本に於て物價問題と云へば、少くも我國の目下の物價の事を考へて居るものと見ねばならぬ。そこで私は目下の我國の物價問題を中心として、御話したいと思ふのであります。併し我國の目下の物價を諒解するには、矢張日本の現在のみならず、多少過去に遡つて見なければならぬ、又日本の物價を近き過去から今日までに亘つて研究するにしても、それを多少外國の物價と比較して見ねばならぬ、それで私は我國の目下の物價問題を研究することを主とし、それに關聯して我國の近き過去の物價を研究し、更に之を世界列強の物價に比較して見やうと思ふ。

此の如く私は目下の物價を研究することを主としますが、目下の物價を研究して、其の物價の状態がよろしくないと思ふことになれば、更に進んでそれに對する策を研究する必要が起る、其策は即ち物價を下げると云ふ策となるのである。現内閣も物價を下げることに就ては、非常に苦心して居るやうであります。又近頃の新聞でも、物價問題は二分賑かになつて居ります。私が要項を書きました時分には、今の内閣の考がまだ今日のやうに分つて居りませぬでしたから、此所に掲げてある題目では盡くして居りませぬ、故に物價政策として、此所に掲げてあるもの、外にも御話するかも知れませぬ。私の話は、物價政策に力を入れたいと思ひます。其物價政策に入る前に、先づ世界戦争以來今日に至る迄の物價變動の大勢と、我國の物價の變動が財界に及ぼした影響を話さねばならぬ。

## 第二、世界戦以來今日に至る迄の物價變動の大勢

六

### 一、世界戦以來今日に至る迄の我國物價の變動

今まで申しましたやうな趣旨で、第一に日本の物價が、近き過去即ち世界戦争の始つて以來、大体どう云ふ風に動いたかと云ふことの事實を見定めねばならぬ。是は諸君も過去六七年間の經驗に依て御承知であらうと思ひますが、學問上で斯う云ふ事を研究するには、唯だ、加減に想像で定める譯に行かない、斯るが故に茲に多少根據のある數字を取つて來なければならぬのであります。所が物價は前申しました通り、色々の品物の價に現はれて來て、或物の價は上つて居り、或物の價は下つて居ることもあつて、譯の分らぬものであります。それにも拘らず、多數の品物に就て、實際賣買せられて居る所の相場を取つて之を平均して見れば、凡そ物が上つたり下つたりすると云ふことが分るのであります。所でそれを總ての所に於て時々刻々やると云ふことは、事實不可能でありますから、私は日本の物價の代表として、東京の卸賣の物價を取つて標準と致します。東京の卸賣の物價に就ては始終日本銀行が調べて之を世間に發表して居る、相當權威のある調査として知られて居ります。其調査は物價指數と云ふもので示して居ります、物價指數と申しますのは、或る一定の時の物價を百なら百とし、それから後の相場が其時分の相場より上つた下つたと云ふことを百分比例で示すのであります。日本銀行の物價調査は明治三十三年の物價を基本としそれを百として、段々移り變つて行く物價の變動を、指數に於て示して居ります。所が戦争以來の物價の變動を知らうと思へば戦争前の物價を百と見て、それを基本として、ど

う云ふ風に動いて居るかを見るのが一番便利であります。それ故に大正三年七月戦争の勃發する前の物價を假りに百として、之を基本數字として、其後の物價の移り變つたのを見ることに致します。其概略の數字は、表として諸君にお配りしてあります。東京の物價は大正三年の七月に百であつたのが、開戦後第一年即ち大正三年七月から四年の六月に至るまでに於て少し下つた、是は戦争に驚いて、商賣を差控へたり抔した結果であります。所が開戦後第二年即ち大正四年七月から五年の六月に至るまでに於て物價は段々騰つて、戦争前の一割以上に及びました。それから開戦後第三年即ち大正五年七月から六年の六月までに於て、百三十二となつた三割以上騰つて來ました。それから開戦後第四年即ち大正六年七月から七年の六月に至る間に於て、百七十九・八となつた、約八割の騰貴となつたのであります。それから開戦後第五年即ち大正七年七月から八年の六月に至る間に於て——此間に諸君も御承知でありませうが、大正七年の十一月十一日でありましたが、獨逸のカイゼルが講和を申出されましたから平和の時期を半分含んで居ります、併し講和はまだ出來て居りませぬ、只鐵砲を撃つことを止めたに過ぎませぬでした——物價は二百十八になつた、正しく戦争前の二倍二割近くになつた譯であります、此の如く戦争の將に終らんとする時に際し、日本の物價は大飛躍を試みたのであります。講和は愈々大正八年六月ヴェルサイユ會議で決まつたのであります。其平和條約が結ばれた後に至り我國の物價は更にドン／＼と騰り大正九年三月頃に至るまでに於て殆んど奔馬の如き勢で進んで來て終に物價指數は三百四十を示すに至つたのであります。さう云ふ風に日本の物價は戦争から段々騰つて行つたが、戦争が済んで講和條約が成立つた後、非常な大躍進を試みたのであります、是は日本の物價變動史の上に於て非常

に大切な事實であります。

所が大正九年の四月頃から恐慌が起つて、或物は急轉直下して下落して來たのであります。それで反動期に入つて來たのである。此年の四、五、六、七、八、九、十、十一、十二月から、大正十年の一、二、三、四月に至り、月々物價が下つた、大正十年の四月に至つて物價指數は二〇〇、八となり、一番底となりました。それでも戦争前に較べると二倍の所に居ります、それから又騰り始めて、五月は二百一、六月も二百一となり、七月は二百七となり、八月、九月、十月と段々進め、終に二百三十となつた。是に至つて物價は戦争前の二倍三割の高い水平線に立つたのであります。所で大正十年の十一月、丁度原首相が東京驛で殺されました時分から再び反動時期に入り又物價が下つて來たのであります、それが大正十一年五月に至つて二百四となり、六月には又少々上つて居ります。

以上述べた所を概括しますると、我國の最近物價の變動は大体に於て二期に分つことが出來ます、第一期は戦争の初まつて以來大正九年三月まで上り詰めた時代であります、第二期は大正九年三四月頃から初まり物價が下落の途を辿つて來た時代であります。併し其の第二期も大正九年四月から十年の四月まではズツと下がりましたが十年四月から又候少し上り、十年十一月より又下つて來た。詰まり此の反動期に入つてより下つては又少し上がり、又次ぎに下つたのである、斯う云ふ風な小さな波を描いて居るのであります。是が數字の示す所であり、此の地方は現實に於て其通りになつて居ないかも知れませぬけれども、大体左様な傾向であると言へる、是が日本の物價の變動であります、次に日本の物價の變動を、外國の物價に較べなければならぬのであります。

## 二、世界戦以來今日に至る迄の列強物價の變動

一、物價は、前にも申しましたやうに貨幣と物との比較であります、所が其の貨幣が或國に於ては目茶苦茶になつて居るものがある、例へば露西亞に於ても、獨逸に於ても、佛蘭西に於ても、伊太利に於ても、埃太利に於ても、大陸諸國では不換紙幣をドク／＼出して、貨幣は反古紙のやうになり掛けて居ります。さういふやうに反古紙同様にならんとして居る紙幣を以て物の價を見るから、籠棒に物價が騰つて居ることになるのでありますけれども是等の國の物價を正貨に換算しますと、割合に廉いものになるのであります。私は此の如く貨幣制度の亂れた國の物價を見る必要が無いと思ひます、そこで世界に於て日本と相對立して、貨幣制度の健康を保つて居る所の、英吉利と亞米利加を例に取つて見やうと思ふのであります。今日我國は世界の三大強國の一として、英吉利亞米利加と相並んで、世界に羈を唱へてゐると稱せられて居ります。隨て經濟の方面に於ても、英、米、日の三國を比較するのが大切であります、英、米、日の孰れが今後經濟的に優勝の地位に立つかを判断せんとせば物價から英、米、日を較べるのが一番捷徑であります。丁度物價は人から見れば脈のやうなものであります、平熱であれば、健康であるが、高い熱は病氣であります、脈が澤山搏つてゐればそれも病氣であります、脈と熱を以て人の健康を診断することが出來るならば、物價を以て英、米、日の經濟的健康の程度を比較することが出來るのであります。

これから日英米の物價指數の變動を比較することにします。數字は私の議論の根柢でありますから、諸君のお手許に配付してゐます、表を暫く御覽を願ひたいのであります。第一に倫敦の物價指數はエロ



ノミストと云ふ雑誌社の調べたもので最も權威あるものである、それに據ると、大正三年七月を百と見れば、倫敦の物價は開戦後の第一年に於て既に百十六になつて、一割以上進み、第二年目は百四十六で五割近く進み、第三年には百九十一・八で一寸二倍に進み、第四年には二百二十六・八で二倍二割に進み第五年には三百三十五で三倍三割以上に進み、非常なる物價の騰貴を見たのでありました、英吉利の此の物價の騰貴は戦争以來非常な勢を以て進んだと言へるのであります。所がそれから後日本に大正九年の大恐慌があつたと期を同ふし、英吉利でも反動期に入つて物價が段々下つて來ました、大正九年七月時分には、英吉利は戦前の三倍以上であり、日本は二倍半の邊に下つて居ましたが、大正十年の一月になると、日本は戦前の二倍一割の所にあり、英吉利も戦前の亦二倍一割の處迄下がつたのであります。それから後日本は前に申したやうに、大正十年の四月を底として又上つたのであるが、英吉利は一目散にドン／＼下つて、大正十一年の二月には百六十六となり、一寸戦争前の六割六分高と云ふ所になりました。それから大正十一年の二月から此所四五ヶ月の間は心持程上つて居ります。それで大体英吉利の物價變動史を摘んで申すと、戦争以來平和に至るまでは非常な勢を以て騰貴したが、大正九年より反動期に入つて一目散に下り坂に向つた、極く小さい波はあるけれども、大体に於て英吉利の物價は、迷はないで下げて來たと言へるのであります。そこで英吉利の物價と日本の物價とを比較して御覽になると、英吉利の物價は戦争が起つてから逸早く騰り始め日本よりも早く騰つて、開戦後第五年に三百三十五と云ふ所に至つて居ります、此の進方は日本の及ばざる所でありました。併し其後日本は道に迷つて左顧右盼し、上がつたり、下がつたりしたが、終に下げ切らなかつた其間に英吉利は迷はずにズツと下

つたのであります。詰まり英吉利の物價は、日本よりは下り振りに於て徹底して居るのであります、是は非常に大切な點であります。

次に紐育の物價を見ますと、紐育の物價は戦争前を百としますれば、戦争に入つて段々騰貴して參りました。數字を読みませぬが、開戦後の第五年より講和後の第一年時代に至つて最も高い所に達しました、尙詳しく云へば、大正九年二月から五月頃に至つて戦前の物價の二倍四割となつたのである、それを時とし、同年六月頃から下つて來たのであります。所が其の下つて來るのが非常に徹底的で、月々例外なくドシ／＼下がり、終に大正十年の六月になつて戦争前の二割三分位の所まで下つたのであります、それから後日本と同じく少し騰り出して、今日は百三十五と云ふ所に止まつて居ります。紐育の物價を亞米利加の物價の代表とし、其大勢を見ると、其初めに當つては日本よりも早く騰つて居りますが、其の最高點は日本程に行つて居りませぬ。而して下り坂になりますと、徹底的にえらい勢で下つて今日であります、戦争前の物價に比して、三割五分位の高い所に居るに過ぎぬのであります。

三、彼 我 の 比 較

今私の話しました、日本と英吉利と亞米利加との比較を、もう一度能く分るやうに御話致します。戦争の間は英吉利や亞米利加の物價の騰貴は、日本よりも早くして且つ大であつた、是は一つの事實であります。即ち戦争の續いて居る間は日本の物價も騰貴したが、英吉利や亞米利加の物價騰貴は、日本よりも早くさうして大股であつた。それが戦争後はどうなつたかと云ふと、皆な共に反落時代に入つて、其の下落する程度は、英吉利や亞米利加は日本よりも大且つ速かである。だから日本は今に於ては物價

の下がることに於て一番後れてゐる、従て物價が最も高い程度に居る譯である。是か議論の基礎になるのであります。更に目下の物價と較べて見るに、日本の物價指數は、最近五月に於て戦争前の相場に比し二百四であり、六月に於て二百七であります、大体二倍強であります。之に反して英吉利の最近物價は戦争前よりも七割方高く、亞米利加の最近物價は戦争前よりも三割五分方騰貴して居るに過ぎませぬ。勿論是は倫敦、紐育、東京の物價を實際に就て調べたものであるから、其他の地方に於ては多少の出入がありませうが、是で少くも大勢を讀むことが出来るのであります。即ち戦争前に於ては、其當時の物價を一の水平線とし英米日は之に依つて貿易をやつて居つたのであります。所か現状はどうかと云ふと、日本の物價は戦争前の水平線から二倍位ゐる所に居り英吉利は七割高い所に居り、亞米利加は三割半高い所に居ります。今戦前に比し二倍の高さを三つに分けて見ると、英吉利は戦争前の約三分の二高い階段の所に居り、亞米利加は戦争前の約三分の一高い階段に上つて居り、日本は其の倍の所に居るのであります。戦争前の物價を標準にするに、亞米利加は一番之に近くなつて居り、英吉利は其次で、日本は一番遠ざかつて居ります。尙ほ之を言葉を変えて言ふならば、日本は一番物價の高い國で、亞米利加は一番物價の低い國と云ふことになるのであります。

### 第三、我國に於ける物價の變動が財界に及ぼせる影響

#### 一、世界戦以來大正九年三月迄の物價と財界

是から第三段に進みまして、我國に於ける物價がどう云ふ風に財界に響いて來たか、物價の變動が如何なる影響を財界に與へたかといふことを研究して見ます、前に申しました通り、我國物價變動の歴史から申すと、世界戦争が始つてから大正九年三月までが、第一期で物價の上り詰めた時期であり、それから後ちが反動時期となるのであります。それで先づ第一期物價の段々騰つて來た時分に、日本の財界は是に依て如何なる影響を受けたかと云ふ事を御話致します。それに就て一つ諸君の記憶に留めて貰ひたいことは、日本の物價は騰つて居りますが、此時代は日本の物價が騰るよりも、英米等の物價が更に一層騰つて居つたことであり、此の第一期に於て何故に物價が騰貴したかと云ふに、その原因は簡單であります。此の戦争の爲めに莫大なる費用を使つたと云ふことにあります、此の戦争に於て主として戦つた國は歐羅巴に於ける所の大國であり、それに亞米利加や日本迄が加はり終に世界戦となつた、此戦争の爲めに使つた費用は驚くべき巨額で、歴史上未だ曾て見ざる所であり、後とで總勘定をして見ると、戦争の爲めに使つた金は四千億圓と云ふのであります、平均すると一年に一千億圓程金を使つて居つた譯であります、獨逸や英吉利や佛蘭西のやうな國は、一國で四年間に七八百億から千億圓の軍費を投じたのであります。千億圓と云つても一寸諸君の頭に入れ難いですが、千億圓の借金をすると、五分の利子にしても一年の利子は五拾億圓になります、大正十一年の日本の一般會計は拾四億八千萬圓で特別會計を合すれば約參拾億圓となります、さうして見れば是等の國の戦時公債の利子を拂ふ丈けに日本の一般會計の三倍以上のものを拂はなければならぬと云ふ譯であります、以て如何に巨額の金を使つたと云ふことを想像することが出來まじやう。それは何に使つたかと云ふと、兵隊に飯を食はす、靴

を穿かす、軍服を着せる、背囊を負はしめる、鐵砲を授ける、彈丸を授けるさう云ふ物に使つたのであります。此くして四年間に四千億圓の金を世界に散らしたのであります。謂はゞ金の雨を降らした様のもので、金が箆棒に澤山出来たやうな形になりました。而して其金を以て物を買つた、そこで歐羅巴に於て物が段々騰貴して來たのであります。日本でも四千億圓の中の一部が使はれ、物が買はれて來たから物價が騰貴するに至つたのであります。

是は極く大体論であります、今少しく詳細に戦争の始まつた以來、我國に於て物價が騰貴して來た迹を尋ねて見ましやう。一番初め戦争が始まりました時は一寸物價は下がつた、所が大正三年の終りから四年の始め頃に至り、羽二重杯は、飛行機に必要な品だと云ふので値が出て參りました。それから軍需品、例へば鐵砲を拵へる鐵とか、銅とか云ふやうな物が騰貴して來ました、久原杯の採掘した銅はいらい勢で賣れた、それは主として露西亞へ賣つたのであります、さう云ふ風に戦争に必要な品物が騰貴した爲めに、軍需品成金が出来たのであります。それからもう一つは、歐羅巴から始終來て居つた物が戦争の爲めに來なくなつた、それが爲めにさういふ物が騰貴して來た、例へば我々の着物を染める染料の如きは其著しき例で、非常に騰貴しました、それで染料成金が出来た位であります。さう云ふ風に先づ軍需品とか、歐羅巴の特製品とか云ふ物が騰貴したのですから、一般に物價が騰貴したとは云へないですが、それが段々一般の物價の騰貴を誘ひ來つたのであります。それは斯う云ふ譯である、染料が日本へ來なくなつたと同じ様に、從來歐羅巴で拵へて世界の他の方面に賣つて居つた物が、戦争の初まつてから、出て行かなくなつた、そこで世界全体の上に於て品不足になつて來た、此處に乗じて日本

は品物を供給することになり、どんな品物であつても支那や南洋や印度や其他の國へドン／＼賣れて行つた、甚しきは歐羅巴の製造元の所に迄賣れて行つた、斯くして段々總ての物價が騰貴して來たのであります。さう云ふ風に初めは特別の物の價が高くなつたのであります、後には一般の物價が騰貴することになりました。

以上述べました通り第一期に於て物價は段々騰貴して來ましたが、其物價の騰り方は歐米諸國の物價の騰り方程激しくなかつたのであります、それが茲に特に注意せねばならぬことである、例へば日本の品物と歐羅巴の品物と較べると、日本の品物が廉い、それで日本の品物が歐羅巴へ賣れて行つたのである、莫大小も行けば、硝子も行つた、硝子と云へば、近頃漸く物になりかけたに過ぎぬ、それが製造の本國まで行つたと云ふことである。それは日本の物價が騰つたと雖もまだ歐羅巴の物價よりも廉かつた爲めである、品物は何と云つても高い所へ持つて行つて賣られるのであります、一つの品が日本で拾錢歐羅巴で拾五錢であるとしみますと日本の拾錢の品を誰れでも買ひます。此の如く歐羅巴の物價が高く、日本の物價が之に比して廉かつたので日本の品物を歐羅巴へ持つて行つても賣れたのであり、又之と同時に歐羅巴の品物が日本に入つて來たのである。さう云ふ所から日本の物價が騰貴して、之が貿易上に現はれて、輸出超過となつて來たのであります。而して此の輸出超過が日本の財界を根柢から變へて行つたのであります。諸君も御記憶でありませうが、戦争の始まる前は日本の正貨が非常に少なくなつたので、日本銀行の兌換制度が維持されるかどうか分らぬと疑ふ者もあつて、人心恟々の有様でありました。所が戦争以來輸出超過がドン／＼増加して來ました、其の度合は大正四年に於て先づ壹億七千萬圓

の多きに達した、戦争の始まる前は、日本の正貨は貳億圓少々でありましたから、壹億七千萬圓の正貨を得た時には、鬼の首でも取つたやうに喜んだのであります。所が其次の大正五年には參億七千萬圓の輸出超過となり、大正六年には五億七千萬圓の輸出超過となり、大正七年には貳億九千四百萬圓の輸出超過となつた。斯う云ふ風に第一期の物價騰貴時代に大正四、五、六、七年に於ては物價は騰貴しましたが、世界の物價の騰貴に及ばなかつたので、日本の輸出超過はえらい勢を以て進んで來たのであります。所がそれに従つて次のやうな現象が現はれた、それは爲替の關係であります。輸出が超過して居りますから、その超過額だけは金で我國に拂はれることになるのであります。輸出入が同じであつて支拂ふのと受取るのが同じであつたら金を動かさずに済みますが、我國に受取る金が多いとすればそれだけ日本へ入つて來る形になります、所で其金は悉く我國に取寄せないで、外國へ置いたのもあり外國へ從來の債務を拂つたのもあります、故に輸出超過額が金として我國に輸入したと見ることは出來ぬ併し輸出超過に相當する品物を賣つた人から見ると、その人は日本に居るのであるから日本で金を得ねばならぬ、そこで外國人に對する債權は之を爲替銀行に賣る、爲替銀行は外國より正貨を得る權利を有することになるも、正貨を得て庫中に藏して置く譯に行かぬ、故に之を日本銀行に賣るのである、日本銀行は外國に對する債權又は正貨を買ひ、之に對し兌換券を以て拂ふのであります。諸君は多く、まだ拾圓金貨の顔を見られないだらうと思ふ、日本は金貨國でありますけれども、金貨は餘り流通して居りませぬ、金貨は日本銀行の金庫の中に眠て居ります。それですから金がどれだけ儲かつて、其金は大抵日本銀行の兌換券で支拂はれるのであります。斯様な譯で巨額の輸出超過があるに従ふて通貨が膨脹

して來たのであります。日本銀行は其買つた正貨を悉く取寄せないで中には長く外國に置いたのもあつた、それが所謂在外正貨である、尤も在外正貨と云ふものは、即ち戦争が始まらない前にもあつた。戦争前に於ては我國の正貨が少かつた、外國で借金し、其の借金したものに依て、日本は外國公債への利子其他の債務を拂つて居つたのであります。外國で借りた金を日本へ持つて來る必要もなかつたが、又それを許されなかつた、詰り倫敦で借りた金は倫敦へ置くことになつて居りました、正貨は牢屋へ入れられて居つたと言つても可いのであります。それが在外正貨の本でありましたが、戦争以來輸出超過に依つて得たる正貨が増すに従ひ、之をも外國へ置いたのであります。併し正貨を外國に置いても、それを得るが爲めに日本銀行は兌換券を發行しましたから兌換券の社會に流通するものが多くなつて來たです。此くして兌換券の膨脹に依て、通貨が多くなつたから丁度海面が高くなつたと同様に、貿易に關係の無い物の價も高い水平線上に上げられた、例へば百姓は農産物を外國へ賣りませぬ、又外國から買ひませぬ、それでも恰も海面が高くなるに従つて海上に浮んで居る船が高い處に居るやうに通貨が膨脹し物價が騰貴するに従ふて農産物もそれに比例して騰つて來た、それで米の價が四拾圓五拾圓六拾圓と云ふ風に騰つたのであります。此くして總ての物價が騰貴し、百花爛漫たる黄金時代が現出せられ、染料成金、銅成金、鐵成金、船成金が出來、お百姓様にも成金が出來て來ると云ふ時代となつたのであります。

以上述べました様な譯で物價が段々と騰貴して來ましたが、そうなつて、茲に日本國民の經濟上の確信が變つて來たのであります、初め戦争の勃發當時に於ては戦争は恐ろしいものと思つて畏縮した、從

つて物價をも下げたが大正四年、五年、六年、七年と段々物價が騰貴して來るに及んで、國民は實物教育を受け、戦争の續く限り物價は騰貴すると云ふ確信を得たのであります。慥か大正五年十二月の頃と思ひますが、獨逸のカイゼルが講和を提唱しました、其電報が日本へ來ると、雷が落ちた様に日本の財界を驚かした、それと云ふも日本國民が齊しく戦争の何時までも續かんことを希望して居つたのに其の希望が裏切られ様としたからであります。平和が人類の目的であるのに、其の平和を望まぬと云ふ日本國民は、いらい哲學を持つたものといはねばならぬ。何故に戦争の續くことを希望したかと云ふに、それは戦争の續く限り物價が騰貴し日本品が世界の何れの所にも賣れて行き大に儲かるからであります、此戦争中には粗製濫造も盛に行はれました、どんな製品であつても、苟も品物の外形さへ備へて居れば賣れて行つたのであります、今一例を取りますが戦時中澤山西伯利亞へ行つたそうでありましたが、其日本の鉛筆を買つて見ると形は非常に奇麗だ、所で削つて見ると直ぐ心が無くなる、反對の方を削つても直ぐ又心が無くなる、真中を折つて見ると何も無い、心は兩端にチョビット有る丈けである、そう云ふ様で鉛筆でも高い直段で、西伯利亞へ賣れてつたのであります。當時世界的に物の不足が一通りでなかつたことをそれに依ても想像し得られるのであります。殆んど鉛筆といへない様な物を鉛筆として賣るのであるから儲かることは論ずる迄も無い。そんな譯でありますから新しい事業は雨後の筍の如く起つた而してそれが皆當つたのであります、染料にしても、染料は一体獨逸の鍛えた工業であります、獨逸品が輸入せられぬ、而して染料の價は高いから、幼稚なる日本の染料工業でも相當に儲けることが出來たのであります、さう云ふ風で商工業が勃興したのであります。農業も勿論、農産物の騰貴に依つて儲

け副業をやる所では其副業でも相當儲けたのであります、何をいつても商工業者が一番儲けた譯であります。

此の如く物價の騰貴は諸事業の勃興になり、殊に商工業を盛ならしめたが、それと同様に又大なる副業物を齎らした、それは外でも無い投機です、思惑です、山です、賭博に似たやうなものです、それが盛んに流行し始めた、そして終に日本國民の血となり肉となつたのであります。それがどう云ふ風に現はれたかと云ふに、今申したやうに物價は騰貴すると定つた、日本國民は戦争のあらん限り物價が騰貴するものと確信するに至つた。例へば或る物の値段は今月壹圓とすれば、來月は壹圓貳拾錢、再來月は壹圓參拾錢、一年先きは貳圓になると考ふるに至つた。さう云ふ時期に際して金儲をするは簡單である物を買つて置けばよい、物を製造しても賣らずに置けばよい、そうして置けば置く程値段が高くなつて儲けられるからであります、商賣の道は物を買つて賣らざりに在り、買溜めであり賣惜みである。是が日本人の頭に浸込んだ。例へば酒店へ行く、酒藏に酒が澤山あるのに拘らず、生憎であります、私の所には酒はありませぬと云ふのであります、無いではない有るけれども賣らないのであります、それも其筈です、今賣れば安く賣らなければならぬ、一と月二た月先きになるとモット高く賣れる、それですから賣らざるに若かずと考ふるに至るのであります、又事實さう云ふ事をして非常な金儲をした人があります。諸君も御記憶でありませうが、其當時寺内内閣の農商務大臣仲小路さんは之を見て、是はいかぬ、斯うして置けば物價は騰貴して休まぬ、其上、物を買ふても賣る者が賣らぬ、それでは大變な經濟上の不安定であると云つて之を征伐する爲めに暴利取締令を發した、賣惜み買溜をしてはならぬとい

ふのであつた。所が皆な金儲けをしやうと思つてゐる連中のみであるから買溜めである物を賣拂へと言つても中々賣らなかつた、寺内内閣が倒れて原内閣が起つた時分に、此の暴利取締令をどうしたか云ふに、それが中々面白い、時の山本農商務大臣は斯う云つた、是は我家に傳はつて來た寶刀である、寶刀を捨てる譯に行かぬ、併し俺れは此の寶刀を抜いて人を斬ることをせぬと斯う言つたのであります。暴利取締令は廢しはしないが、それに依つて制裁をせぬと云ふことになる、従つて買溜め賣惜み勝手放題たるべしと云ふことに歸するのであります、そこで皆人は益々買溜め賣惜みをやつた、それでマンマと當つた者もあるのであります。所が商品と云つても、容積の大なる物は買溜め賣惜みをするに土藏へ置かなければならない、思惑も多少厄介であり、誰にでも同じ様に容易に出來ぬ、そこで商品に於ても價が高くて分量の少ない物を選んで買溜め賣惜みをして儲ける様になりました、所がそれよりもつと容易に思惑の出來るものがある、それは有價證券である、公債にしる社債にしる、株券にしる、紙一枚で表面價格の千圓とか萬圓とか云ふのがあり、又十株とか百株とか書かれてあるのがある、そつといふ物を貯ふるに土藏も入らぬ、而して是等の有價證券殊に株を買つて持つて居ると其價がドン／＼騰貴する、其高くなるのを待つて賣れば大に儲かるのである。此くして株を買つて置きさへすればよいと云ふ確信が國民に出來て來たのであります。そうして株熱が日本國中に非常に蔓延して來たのであります。そうなつて來ると、詰らぬ株でも、莫迦に高い値段になつて來、好い株に至つては、驚くべき高價となつたのであります、關西地方では、大阪株式取引所の新株を大新、東京株式取引所の新株を東新と唱へて居ります、それを百姓迄が買ふ様になつた、一体取引所は何を製造する會社だらう、何を製造する會社か

知らないが東新や、大新を買つて置けば儲かる、と云ふので、それを争つて買つたのである、所が是等の株は高くなつた際には十枚で幾千圓と云ふ巨額に上つたから、百姓等には手にをへぬ、そこで百姓等は何か俺等の手に合つたものが無いか、値の低いものがあればよいと云ふ様な望を持つて来た、此心理状態を讀みもつと値の低い株、例へば一株貳拾圓參拾圓のものを提供すると云ふ者が出来て来た、それは新しい會社を製造することであつた、其の時分には會社を拵へれば、其の會社はどんな會社が分らんことも發企人が發企すると、株を俺れにも分けて呉れと言つて八方から責立てる有様であつた、貳圓五拾錢拂込の株が參拾圓する、さうすると拾七圓五拾錢は權利の値である、それがプレミアムである、プレミアムと云ふ字は英語である、英語を學ばなかつた日本人は知らなかつたのである、其の時分からプレミアムと云ふ言葉が日本語になつて仕舞つた、プレミアムといへば日本人には譯の分らない文字であるべきに、日本人はそれを奥床しい金の儲かりさうな意味の文字と思つてか、彼の株はプレミアムが拾圓附く貳拾圓附くと言ふと飛び付いてそれを買つたのであります、此くして會社を製造することが流行した東京の大新聞大阪の大新聞に廣告をして、此の會社は何割の配當が出来る、一株五拾圓のものが直に百圓になると言ふ様に宣傳すると、其會社が何であらうが其發起人の誰であるかを問はない、皆が飛び付いて買ふのであつた。従前にあつては、我國にて會社を起すには、澁澤子爵とか其他信用のある人を發起人とせなければ株の應募者が無かつたのであつたが、此の時代になつては澁澤子爵を要しない、猫でも杓子でも、誰れでも構はない、イ、加減に名前を取つて来て譯の分らない大きな廣告をする應募者が山の如く集つて来るのである。所が所謂會社製造人は會社を起して誠心誠意、事業を經營せんとす

るので無い、株を賣つて後は逐電する者もある、株の應募者は金を取られ損になる。斯う云ふ會社は物價の騰貴して已まぬ時分に於て、能く出来るものである、決して日本ばかりではない、之を泡沫會社と云ふのである、決して水の泡を拵へる會社ではない、運命が水の泡の如きものであるから斯く名づけるのである。さう云ふ泡沫會社の出来るのは物價騰貴の餘勢であります。是は國民が何か濡手で粟の攫取りを遣らうと考へ、株を買つて置いて高くなるのを待つて賣らうと云ふ慾を持つて來たのに乗して起つたのである、それであるから、投機心も亦一の病源であるといはねばならぬ、投機心は微菌である、此の微菌が人間の頭に入つて、抜けなくなつて來たのであります、兎に角物價の騰貴に伴ひ、第一には眞面目に事業を起さんとして會社を設立する者が出來、第二には鉛筆の如くにして鉛筆でない物を拵へるやうな粗製濫造の會社が出來、第三には泡沫會社を拵へる者が出來て、茲に會社濫興の時代を造り出したのであります。

次に物價の騰貴は金融上に非常に影響を及ぼすこととなつた。物價が騰貴するに際し買溜をする者は金を要する、株券が騰貴するに際し買思惑を試むる者は又金を要する、是等の人は皆銀行へ行つて金を借りるのであります、物價が高くなるのであるから同一商品にしても同一株券にしても従前よりも二倍三倍にもなつたから、それを買はうとすると従前より二倍三倍の金が要る、大正八年から九年の初までに於て此の如き資金の需要者が非常な勢を以て銀行に殺到して來た。それであるから銀行は何程金があつても、段々足らなくなつて來たのであつた。大正八年の秋には既に其徴候が見えて來た、そこで日本銀行は此の大勢を看て容易ならぬとし、大正九年の秋に二度も金利を引き上げるに至つた。金利を引き上



げると云ふことは、金を貸さないのでないけれども、此金は高いぞと云ふのであるから、箆棒に儲からなければ借るべきで無いと云ふことを諷示した居る。日本銀行が僅かの間に二度迄も金利を引き上げたのは、餘り金を借りてはいかぬと云ふことを警告したものと見ねばならぬ。又他の方面から言ふと、餘り投機をやつてはいかぬ、山をやつてはいかぬ、儲かるものでないから止めろと戒め投機に熱し切つて居つた人の頭に冷水を掛けたのであつた。然るに日本國民は熱し切つて居つたから、俺れは山をやる、何を云ふか黙れと云ふ様な權幕で、無二無三に走つて行つた、それで物價も亦大正九年の一月、二月、三月の頃はいらい勢で騰つて來たから、國民は買思惑をなすことに後れざらんと欲して走つたのであつた次に新しく起された會社は拂込が必要となる、其拂込に莫大な金が入用である、それでも銀行に行つて借らうとしたのである。所で銀行も商品や株の買思惑に相當に融通し來つてゐるので、さう餘裕かない金は益々缺乏して來た、そこで此金融の大勢に通じたエラモノは、大正九年三月頃になつて自分の持つて居る株を皆賣つてしまふ者が出來た。それを機會として株券の相場が急轉直下の勢で下つてしまつた天下の大勢如何とも仕様がなない。銀行へ金を貸して呉れろと言つて、公債證書を持つて行つても、頭を振つて貸して呉れない。泡沫會社の株券は二束三文となつた、そんな物を持つて行つても銀行では無論金を貸さない、そこで金融梗塞と云ふ状態を生じて來た。是が反動期に來る第一歩でありました。事の茲に至るのは、經濟の理法から言つて分り切つたことであります。財界の大勢の讀める人は株の高い所で賣つて逃げて仕舞ひましたが、日本國民の多數には其大勢が能く分りませぬから、丁度噴火山頭に舞踏して、俺れは金を儲けた、天國へ昇つたと思つて居る刹那に、其噴火山の口から落ちて、憫れ果敢な

き最期を遂げる人が多かつたものであります。之を一つの演劇と見れば見られないことでもありません。が其身になつて見れば實に堪らない事であります。是は畢竟物價が騰つて己まぬものだと思つた結果、茲に至つたものと見ねばならぬ。既にお話しました通り、戦争の初まりました當時は、皆人は物價が騰貴するものなりや否やに就て疑つてゐた、否寧ろ否定物に考へてゐたものが多かつた。所が實物教育を受けてから、戦争は物價を騰貴せしむるものであると云ふことが分つた。戦争が濟んだら物價が騰貴する原因が無くなる譯ですから、有頂天になつてはいかぬと考へなければならぬのであります。丁度戦争が終つた時分には、一寸立竦みの状態でありましたけれども、應て我國民は戦争が終つても物價は騰貴すると考ふるやうになつた。何故さう考へたかと云ふと、戦争で儲けた額は夥しいものであり、正貨丈けでも貳拾餘億圓入つて居るではないか、彼の貳拾餘億圓は、戦争が濟んだからと云つて消ゆるものではない、此の如く多く金を持つて居る以上は物價は騰貴するにきまつてゐると、斯う考へたのであつた。一体戦争以來物價の騰貴したのは世界的であつたが、それは四千億圓使つた餘波に過ぎぬ、戦争終つてから最早そんな大金を使ふ者は無いと云ふことが明であるに拘らず、日本國民は物價は益々騰貴し、景氣は益々好くなるものであると考へたのであつた、此考が今の禍を起した基であります。是で物價の第一期から第二期に至る移變りの有様を明にした次第であります、これから後ちどうなつたかと云ふことは明日御話致します。

昨日「我國に於ける物價の變動が、財界に及ぼせる影響」と云ふ事に就て御話をし掛けて置きました第一期は世界戦亂の結果物價の騰貴して止まざる時代でありますが、其の物價の騰貴して止まざる時代

が極點に達して大正九年三、四月の交に、急轉直下して物價の暴落となつた、其の暴落となつた事情を述べて置きました。今日の御話致しますのは其の續であります、即ち第二期に入つて物價の反落時代となつた、それが財界に如何なる影響を與へたかと云ふことを御話致します。

昨日私は、斯う云ふ事を申して置きました、日本國民は戦争が始つた時分には、戦争は物價を下げて景氣を悪くするものだと思つた所が、暫らくして實物教育の結果、戦争は物價を上げるもので、景氣を好くするものであると云ふことを信するに至つた。所が戦争が了つたならば、物價も下り、景氣が悪くなると思つて居つたのに、戦争中に儲かつた金が随分あるので、物價は決して下らぬし、景氣は益々好いものであると云ふ、確信を得るに至つたと云ふことを御話致しました。所が昨日も申しましたやうに、物價の大變動の中心は、世界大戦争にあつたのであります、此戦争で四千億圓の金を投棄して、物を買つたから物價が騰貴したのであります、四千億圓の浪費者が影を潜めてしまつた曉には常識の上から考へても、物價騰貴の勢が茲に頓挫しなければならぬのであります。勿論戦争が濟んでも、多少情勢がありましたから物價騰貴が止まないで尙少し進んで來ましたのであつたが、其後之を實際に徴して見ると、何れの國にても物價の下落を見るに至りました、我國も其數に漏れなかつたのであります。斯くして何れの國も、騰貴時代から反落時代に入つてゐますが、其過渡期に於て最も急轉直下の藝當を演じたのは我日本でありました、又其反落時代に入る先驅を爲したのも我日本であるのであります此點は如何にも男性的で、男らしくやつたと云へば云へるでありませう、日本人の國民性が此處に表はれたものを見るべきであります、併し此の如き物價の激變は財界に取つては宜しくないであります。他

の國に於ては、日本のやうに急轉直下してゐない、そこが日本と外國の違ふ所で、財界に及ぼす影響も亦違つて來るのであります。日本はさういふ風に急轉直下の勢で各國に先だつて物價の暴落を來たしたが、其後の経過如何と云へば、遅々として牛の歩みの如く徹底的に下げ切らない。其間に他の國はドン／＼物價を下げて來た、そこで今日は日本の物價が一番高い所に居ることゝなつたのであります。此事業が財界に非常な影響を及ぼして居るのであります。これより尙少しく立ち入つて第二期に於ける物價と財界の關係を御話したいと思ふのであります。

## 二、大正九年四月以來の物價と財界

此の物價反落時代は、大正九年四月から今日までを包括して云ふのでありますが、此時代を尙小さい時期に分つて見れば、其の第一の小期は大正九年四月から大正十年四月に至るまで、一年の間で物價の急轉直下した跡始末を付けやうと焦つた時代で、物價の下つて居るのを多少支へて行かうと云ふ努力の現はれた時であります。而して其の第二の小期は、大正十年四月から約半ヶ年の間大正十年十月に至るまで復た物價が少々騰貴して來た時代であります。其後が第三小期で、漸落時代と申しても宜しいのであります。

先づ此の第一小期、から研究して行きます、物價が暴落した後、之に對して何ぞか跡始末をしたいと云ふ事が起つて來た、何故さう云ふ事が起つて來たかと云ふと、物價の急落した影響が随分嚴しいものであつたからであります。物價が高くなると思つて買つて置いたのに、其物價が下つたのであるから皆な損をすると云ふ譯であります。而して其の下り方が甚しければ甚しい程損失が大となる譯であります。

昨日も思惑者が非常な芝居を打つたことを申しましたが、其の思惑者程痛いのであります。思惑者は澤山に買溜賣惜みをした仲小路さんの威かしも一向利かなかつた、さうして世間の非難を馬耳東風に聞流して居つた、然るに今や物價は暴落した、買った直段どころでは無い、ズット下つて来た、株券の如きは最も慘落を極めたのであります。殊に新しい泡沫會社の株は段々本性を發揮して、殆んど二足三文となつて仕舞つた、自分の持つて居る資金で思惑をやつて居つたのはまだ宜しいけれども、之を銀行から借りたり、他から借りたりしてやつて居つた人間は、首も廻らぬと云ふことになつて来たのであります。又さう云ふ思惑をやらぬ普通の商賣をやつて居る者でも、苟くも品物の仕入をしてゐた以上は、物價の暴落に遇ふては皆な同様の影響を受けたのであります。工業者にしても、眞面目な工業をやつて居つても、其の買った原料が下る、製造して見た所が、其物が廉くしか賣れないから、工業者も皆な損失を受けること云ふことになつて来た譯であります。さういふ風になつて来たから、何とか之を救済しなければならぬ、之を整理しなければならぬと云ふ氣分が出て来た、其の當時の日本國民は跡始末をどうするかと云ふことに就て苦心した、跡始末をせないものの中には、内部で熟んで居るのに膏藥を貼つて、何でもなさうに見せ掛けて居つたのが澤山あつた。外から膏藥を貼つた丈で、眞の治療で無い、畢竟外科手術を嫌つて一日の安を貪つた譯である。西洋の醫術の盛んなる今日に於て、漢法醫流の時代後れの事を平氣でやつて居つたと評しても不可で無い、是が後に累を爲した譯であります。併し膏藥貼では行かぬ、何とか處置を付けなければならぬものも亦澤山出て来た。私は日本の重要産物の中で一番日本の財界に影響を持つて居る物を例を取つて御話ませう、それは外でもない綿糸と生糸であります。生

糸は日本の輸出貿易の第一位に居る物であります、綿糸は棉花を原料としますが、其棉花は輸入貿易の第一位を占めてゐます、其綿糸我々が國內に消費する上に之を外國へ輸出する、外國輸出品としては生糸に亞いで第二位を占めて居ります。それでありますから日本の財界の重心點は生糸業及び綿糸紡績業に集つて居ると謂つても宜しい、それ故に此の二つを例に取つて見ると、凡そ物價の暴落時代に於て、日本國民が如何に焦つて、どんな事をやつたか分るのであります。先づ生糸から申します、生糸が非常に下つて止まぬと云ふ時に、生糸業者は非常に困つて來た。時は三月四月であつたから其の前年の繭を以つて生糸を製してゐた時であります、前年の繭は高く買つて居つた、それに生糸が廉くなると大變困まります、そこで生糸の直段を、イ、加減な所で支へやうとしたのであります。それが具體的に現はれて、帝國蠶糸會社——帝蠶と云はれるものが出來た、生糸業者が金を出し、合つて會社を設立し、政府が後ろに居つて、金をウンと融通してやると云ふ約束が取り結ばれ、此の會社をして其邊に有餘つて居る生糸を買集めさせた、當時金融界に於ては資金に缺乏して居つた、而して生糸は市場に澤山あつたから生糸の値が下がつたのである。そこで其の市場にある生糸を買取つてしまへば、下げ様にも、物か無くなるからと云ふので、帝國蠶糸會社を拵へ、それに金を注込んで之を買取らせたのであります。さうして其の直段は千五百圓と最低度を定めて、それより落さぬと云ふことでありました、所が其の當時實際に於て、生糸の値は千五百圓以下に落ちた、そこで横濱の生糸取引所に於て、生糸の相場が立たないと云ふことが長い間あつたのであります。是は顯著なる事實で、如何に日本國民が物價下落に反對し、物價を高く保つて置きたいと云ふ信念に囚はれて居つたかと云ふ著しき例であります。

それから第二には紡績であります、是は此時代に非常な混亂状態に陥つたものであります、物價の騰貴時代に於て、綿糸は非常に高いものになつて、其價は生糸に肉薄して居つたのであります。そは一には綿糸に對する思惑が盛んであつたのにも因ります、思惑師は紡績會社より半ヶ年から一ヶ年先きまでの物を買つて居つたのである、綿糸は騰貴するに定まつて居るとしたのであるから、先きへ先きへと買つて行つたのであらう。之を其の當時の言葉で、實需要に對して假需要と稱したものであります、我々が着物を着る爲めに綿糸が要ると云ふのは實需要であります。所が思惑師が先きへ先きへと買つて行つたのは、實際後ろに居る國民が、其糸を消化するか否か分らぬものである、故に之を假需要と云ふのであります。現に物價暴落の幕を落して見ると、實際國民はそれ程消化する力を持つてゐなかつた、實需要の無いのに思惑師が註文を發して紡績會社に多くの綿糸を造らせたのであつた、そこで出來た綿糸は日本の社會の需要し切れない程多くの量となつて現はれた、所謂生産過剰である。物價騰貴時代に於ては大阪の綿糸商の中には、壹億圓以上の財産を持つた者が相當にあつた、所が此の變動に際して、壹億圓以上の富豪が夢か幻か、何時の間には消えて仕舞つたのであります。そこで何とか之は救はなければならぬと云ふことになつた。其之を救ふには綿糸の生産過剰を無くすると云ふ方法を探るより外に道が無いと云ふことになつた。生糸救済と全く同じ筆法である、そこで紡績業者が集つてシンジケートを拵へたシンジケートは銀行から廉い利子の金を借りて、其金を以て假需要の爲めに、供給過多となつた綿糸を買ひ集めそれを外國へ賣らうと云ふ計畫を立てたのであります。所で此シンジケートは綿糸は買ひ集めたが、偶々世界の銀の相場がハカ／＼しくない爲め支那に賣り出すことも出來ないと云ふので長い間徒

らに綿糸を抱いて、處分することをしなかつたのであります。そこで綿糸に就ては何時迄も低氣壓が去らず動もすると雨模様となりて、人の頭を壓迫して、始末が付かなかつたのであります。併しシンジケートが長く綿糸を抱いてゐたので世間の非難も加はつて來たに就て、後頭之を處分することになりました。それと同時に紡績會社は又自己階級を救ふ爲めに斯う云ふことを考へ出した、それは綿糸が多きに過ぎて其價が下るのであるから、綿糸の價を維持するには品を不足勝にして置くことが必要であると云ふのである、そこで紡績業が一緒になつて、所謂生産制限のカルテルを拵へることになつた、新聞紙上で謂ふ所の操業短縮である。操業短縮と云ふのは、今までの作業を短縮すると云ふのでありますから、綿糸の生産を少なくすることに歸します、生産品を少なくするから、品が不足になつて價が維持せられるのであります、さう云ふ事は財界が混亂状態に陥つた時分には、己むを得ざる政策であるかも知れませぬ。紡績會社が過去に於て財界の波瀾重疊の間を切り抜けて、今日押しも押されもしない日本の工業界の中心勢力となつたのは、此のカルテルと云ふ武器を屢々用ゐる來つた爲めとも見ることが出來ます、大正九年の經濟界の大騒亂に乗じて、昔用ゐる來つたカルテル政策を用ゐたのは大に諒すべきであります併ながらそれからズット後になつても、此政策を維持して改めなかつたので綿糸が大体に於て、或る地點に留つて下らぬことになりました。勿論多少の動搖はありましたが、綿糸は人爲的の政策に依て、其の下落が支へられたことは争へぬ事實であります。

さう云ふ風で生糸の方の遣方と綿糸の遣方は多少違ひはありますが、併し有り餘つて居る供給を一所に集めて市場の壓力を取り去り、それが値を下げないやうにとしたことは、全く符節を合するが如くで

あります。尙操業短縮は紡績業者の取つた策として、人の注目した所となつてゐましたが、其他の事業に於ても之を眞似たものが少くなかつたのであります、私は操業短縮を以て必ずしも悪いとは申しませぬ、當業者が倒れんとする破目に陥つたとき自ら救ふのであるならば、人間に正當防衛があると同じく此の策を是認せねばなりません、併ながら當業者が斯う云ふ政策を講じた結果物價を下げないと云ふことになつた、其事實は、之を事實なりとして指摘せねばならぬのであります。さう云ふ風にして物價が急轉直下して來たのを支へたのであります、外國ではドン／＼物價を下げて熄まざるに拘らず、日本では物價を或る地點に止めて、下げないやうにして仕舞つたのであります。是は勿論實業家のやつた事でありませんが、併し其の半面に於て日本の民衆はどうしたか云ふに、物價引下には餘り努力しなかつたのであります、實は物價を引下げない所の中心動力は民衆に在つたのであります。民衆は戦争以來非常に金を儲けたのであります、大正九年四月の暴落は主として卸賣商大商業大工業の間につた現象であります、民衆の中にも投機をやつて居つた人は勿論關係がありますが、其他の人は餘り關係が無い、民衆の懐の中には金が溜つて居るから中々瞻玉が太い、如何なる品物でもドン／＼買つて熄まなかつた、従つて小賣値段が下らなかつたのであります、さう云ふ風に上と下とが物價の下落に反抗した此事は日本國民たるものが冷靜に考へなければならぬ問題であると思ふのであります。而して尙ほ國民の心の底には、物價の騰貴を歎ぶと云ふ考があります。投機を覺えた人間は大低買思惑をやつたのであります、値段が上つて來ると云ふことは投機に取つて結構である、殊に地方の投機者流には最も結構な事でありませぬ。商賣人から申せば、買つた物が騰貴すれば儲かるから、騰貴することを歎ぶのでありませぬ。



す、工業者や大實業家に在つても、自分が拵へた物が廉かつたら損となるから、少し騰貴する方を賛成するのである、世界の犬勢は物價が一目散に下つて居るに拘らず、日本國民丈けは上下一致して反對に物價が上れよかしと庶幾つたのであります。物價調節の聲なきに非ず、新聞紙上に於ても随分あります。政治家の中にも随分ありますが、併ながら日本國民の腹の底を割つて見ると、私は十中の八九までは、物價の下落に反對した者と思ふのであります。それが表面に現はれて今や第二〇二期に入つたのであります。即ち大正十年四月になつて物價が相當に下つたので下つた波は上つた波と變せよかしと國民は祈つたのであります、そこで又物價が少し上り初めたのであります、此の小反動期は、國民の希望に投合したのであります。勿論此時期に入つても財界の頽勢は少しも直つて居りませぬ、然るに何故に物價騰貴の小反動期を現出したか云ふに、それは金融の變動であります。前御話した通り、第一期に於て投機が盛んになつて、其投機資金が盛に貸出された爲めに、銀行に金が無くなり、終に大正九年三四月頃の金融梗塞の状態を生ずるに至つたのである、それから後ち銀行は可成金を貸さないやうに、又金を回收するやうにして一年の間やつて来た、銀行の金庫に少々金がダブつて来た、銀行の金庫に金がダブつて来ると、それを其儘にして置いては金が遊ぶ、そこで目前の計畫として、公債或は社債を買ふたが更に進んで信用のたしかなる者に金を貸してやらうと云ふことになつた、金を借りた者は有價証券をも買はんとしたので有價証券殊に株券は段々上つて行き、大正十年の九月十月の相場は如きは、大正九年の暴落以前の相場に肉薄した所のももあつたのであります。それは有價証券ばかりでなく、商品の方に於ても亦同じであつた、金融が緩んだと云ふことゝ一年間下落し來つた物價を上げて景氣を好くした

いと云ふ希望とが相合し、更に操業短縮を實行して、品物の少なくなつてゐたものもあつたと云ふ事實が一緒になつて、遂に大正十年五月から約半年間所謂中間景氣を現在したのであります。併し財界の病氣が全然癒たと云ふのでなく、唯だ金融がダブつと云ふか、人の相場のアヤを庶幾ふと云ふ希望とか、操業短縮とか云ふやうなことで中間景氣が起つたに過ぎなかつた、故に原首相が東京驛頭で横死を遂げられたのを機會に又ドン／＼落ちて來たのであります、原首相の兇變が相場を下げたものではありませぬ、下げべき背景が備はつて來てゐた所へ、原首相の兇變が起つたので、それが機會を與へたに過ぎない、實業家か財界の根本的療治をなすことを忘れて一時的にも空元氣を附けて見やうとした報が現はれたのであります、さういふ譯で大正十年十一月から今日に至るまで物價は段々下つて、不景氣は益々深刻に進みつゝあるのであります、是が過去に於ける物價の變動が財界に及ぼした影響の概略であります。

### 三、目下の物價と財界

私は茲に進んで、今日の物價が財界に及ぼしてゐる影響を述べやうと思ひます、今まで御話したやうに、日本の物價は大体に於て下落の方向に向つて居ると言へますが、英吉利や亞米利加の物價の下るのに較べると後れて居る、昨日も申した通り、亞米利加の相場は戦争前の三割方高い所に据つて居ります。英吉利の相場は七割方高い所に据つて居るのに、日本の相場は戦争前の二倍以上になつて居るのであります。此の物價の基調から日本の經濟界が非常な變化を受けて來るのであります。物價變動の第一期に於ては、日本の物價は段々騰貴して止まなかつたけれども、外國に於ける物價の騰貴に後れて居つた、それで今日の財界上は全く第一期の逆が現はれて居ります。先づ一番擧げねばならぬ事實は貿易の逆調

であります、それは輸入が超過して、輸出が少ないと云ふ事であります。前に申しましたやうに、日本の物價の下げやうが外國よりも後れて居つて、日本の物價が一番高い、其の高い物を誰れが買ひに來ませう、高い物を買ふ者は變態心理の人で、普通の人間は買ひませぬ。だから日本の品物は外國へ賣れて行かないで、外國の品がドン／＼入つて來る、此勢は如何としても支へることが出來ない、そこで輸入超過となつて來たのであります。その輸入超過はどうか云ふ風に行はれて居るかど申すと、戦争が始つてから、大正七年まで輸出超過の時代であつたのが、大正八年から急轉して、輸入超過の時期に入つたのであります、尤も大正八年の輸入超過は七千四百萬圓で、知れたものであります。所が大正九年となると參億八千八百萬圓、大正十年には參億六千八百萬圓の輸入超過となりました、それで昨年の上までに既に八億圓の輸入超過となつた譯であります。デ日本國民は、戦争以來初めて壹億七千萬圓の輸出超過を見た時には、鬼の首でも取つたやうに喜んだ、それから參億七千萬圓の輸出超過を見た時には有天頂になつて喜び、それから五億七千萬圓の輸出超過となつて益々氣が驕つた。今や大正八年より十年の終りまでに八億圓の輸入超過を見ることになつて日本國民は餘り之を氣にしないのである、本年の輸入超過に至つては一月は九千九百萬圓、二月は九千九百萬圓、三月は九千九百萬圓で、何れも殆ど壹億に手が届き、四月は五千九百萬圓、五月は千八百萬圓、六月は千八百萬圓といふ有様に、半年の間に參億六千八百萬圓の巨額に達して居るのであります。それから七月は昨日の新聞に據ると、貳百萬圓の輸出超過になつて居る、是は生糸が多少賣れた爲めであらうと思ふ、一体日本の貿易は普通の年ならば、後半期になつて輸出が勝つのであります、それは生糸が出て行くからであります。それで前半期は普通の

年でも輸入が勝つのであります。併し前半期に參億七千萬圓近くの輸入超過となることは、平年には決して有り得へからざることです。本年の如く前半期に巨額の輸入超過があると云ふは物價が高い所に居るからであります、物價が高いから輸入が潮の寄するが如く入つて來るのであります、是は如何にしても防ぎ止めることが出來ないのであります。輸入超過は馴れてしまつたら何でもないと云ふならば去年は參億六千萬圓、一昨年は參億八千萬圓、是が當然であると言ふならば問題になりませぬが、斯う云ふ事が段々續いて行つたならば一体どうなるでありませう。是は近眼者流でなければ、分らなければならぬ筈であります、先づ第一に正貨が減つて行くのであります、正貨は此間まで二十何億圓あつたから、日本國民は成金になつたと思つて居りました、然るに何時の間にかそれが減つて、今日では拾八億五千萬圓——拾八億圓臺に落ちてしまつたです。而して此勢でドン／＼進んで行けば、是が拾五億圓になり、拾貳億圓になり、拾億圓になるのは、決して夢でないのであります。さう云ふ風になつたら日本國民は——今は大きな世帯でありますから樂觀して、少々金が無くなつても、俺れは成金だと言つて居りますけれども——寝ても起つても居られないやうに、悲觀的になりはせぬかと思ふのであります、さうすると、又更に財界が動かすに居れぬのであります。論より證據、現に顯はれて居る現象を御覽なさい、金融が充分に緩まないではありませぬが、一体事業が起らぬのに金融が緩まないと云ふのはおかしい、仕事が澤山あれば金利が高くても構はない、日歩貳錢貳厘で借りても一日百圓に對し五錢に當る儲けをなすならば、貳錢貳厘何ぞ論するに足らんやであります。所が今や儲ける口が無くなつて居る、それに金利が安くならない、仕事をやつてはならぬと云ふことになつて居ることも云へましやう。是は輸入

超過の結果、金が段々減じて行くが爲めであると謂はねばならぬ、不景氣の時に金利が高くては財界は到底振ひ興ることが出来ないであります、斯う云ふことが起つて来るのは財界が減入つて行く所の、一里塚であるとも見ても可いのであります。

次に輸入超過が續くに依つて非常な打撃を被るものは我國の事業であります、それは何故かと云ふと簡單明瞭です、輸出が少くて外國から入る物が多い、今まで日本の國民に物を賣つた上に、外國にも賣つて金を儲けて居つた會社に就いては外國は四方塞りて賣れない、日本丈けでは澤山製造しても捌けない、全体から見ても其の會社は儲からないことになり、外國迄賣らないとしても、我國民に賣つて儲けてゐた會社に就て考ふるも、外國からドン／＼安い品物が入つて來て競争せられるから、其日本品が日本國內に捌けないと云ふことになる、従つて其會社に立行かぬです。それで戦争以來、會社が雨後の筈の如く興つて來ましたけれども、其の健全なるものが幾何あるかと云ふことが疑られて來てゐます。泡沫會社は論ずる迄もない、戦争以前から出來て居る相當基礎の鞏い會社でも非常に困つて居ります。試に船會社を御覽なさい、必ずしも皆戦争成金ではない、戦前から基礎の鞏かつた會社もありますが、それが今日は慘澹たる状態であります。大きな會社が潰れるとは申しませぬけれども、兎に角儲からぬのは事實であります、而して其儲からないのに配當をして居ります、それは所謂蝸配當で、自分の身を喰つて居るのであります。固よりこれには例外の會社もあります、紡績會社は其一例であります、蝸配當をすることは日本國民の病氣であります、物價問題にも非常な影響を持つて居ります、何故に蝸配當をするのでありますか、それは株主なる者が配當を得なければ承知しない、従て配當をしなければ重

役の地位も保ち難いからであります、所で蝸配當は前にも申す通り、自分の肉を食つて行くことになるのであります、私共は飯を食はないでも二日や三日は大丈夫ですが、二年三年は保ちませぬ。會社も自分の肉を食つて一期や二期はやつて行きますが、先きへ行くこと自ら減じる外はありません、我國民は自ら減じる事をやつて居る。配當が出來ないならば、配當しない、事業本位でやつて行くべきでありますそれが日本國民性と相容れないのであります、それと云ふも我國民が景氣の好い時代の事を忘れないからであります、併ながら蝸配當をして止めなければ歩一步墓場へ近づくことになるのであります。

次に今日の我財界を見ますと、第二の中間景氣を起さうと云ふ氣分が出來てゐます、之を商品に就て見ると物價は六月七月と少し上つて居るです。是は昨年第一中間景氣に對して第二の中間景氣が起る徴候として相場師其他實業家は之を謳歌して居る、其の謳歌して居るのを放棄して置くと、昨年と同じく第二の中間景氣を起して、物價を上げて行くかも知れぬ、そうなることそれが又墓場に行く一里塚なるであらうと思ふ、達觀すれば實に身の毛も竦立つ程であります。墓場へ近づくことを誰れも歡ぶ者は無い、又國民經濟上に於て、墓場に近づいて歡ぶ者は無いであります、それですから眞に日本の國を愛する者があるならば、此際病氣の源を除去することに盡力せなければならぬ。病氣の源を除去つたならば、墓場へ向つて行つてゐる方向を轉じて反對の方向へ行くことが出來ませう。然らば其病源は何であるか、それは即ち物價の高いことである、物價の高いと云ふ病氣を除かなければ、百の政策何の効果ないと謂はなければならぬです。故に今日の國民經濟の上から申したならば物價を下けると云ふ政策はご大切なものは無いので、是が經濟上から日本の生命を救ふ所以であると思ふのであります。

私は茲に「我國に於ける物價の變動が財界に及ぼす影響」を結びたい。今まで申した事の要領を申すと、物價は反落時代に入つて来て段々下つて来たが、日本國民の遣方が宜しきを得ない爲めに、小反動を起し、今の所から見ると、世界の大勢に後れて、物價が下がり切らずに居るのであります、何故さう云ふ風に世界の大勢に後れて物價が下らぬかと云ひますと、日本國民が外科手術を受けることを欲しない、上に居る事業家は物價の下ることを阻止せんとし、下に在る民衆は物價を下げることに一向努力しないからであります、さうして其の物價の下がり切らないと云ふことの結果はさうであるかと云ふと、輸入超過は益々盛んで、正貨は段々少なくなり、事業界は段々往生没落を告げると云ふ形になつて来たのであります、さうなりましては世界の經濟競争の眞中に立つて優者となることは到底出來ない、否世界の經濟戦争に於て落伍者となる所の準備既に成れりと申して可いのであります。戦争をして勝つ準備は昔より講せられて居りますが、戦争に負ける準備とは奇なことであり、併し事實は之を誣ゆることが出來ませぬ。之を放棄して置きましたならば、日本は世界の經濟場裡に於てマンマと敗者になつてしまいます、さうして其の結果はどうかと云ふと、日本國民は一体に非常な貧乏になると云ふことでもあります。此の現状が間違つて居ないとするならば、次に出て來るのが物價引下策であります。

#### 第四、物價引下策

第四に進みまして、物價引下策に就て御話いたします。物價を引下げると云ふことに就て、諄いやう

ですけれども、一遍根本問題を御話したいと思ふのであります。私共が物價引下を論ずるのは何故かと云ふと、其の根本問題は國家問題に在るのであります。日本の國民を基礎にした國家と云ふものが存立して居る、其の國家を何所までも維持し、其の國家を發達せしめやうと云ふことが頭にある譯であります。デさう云ふ風に日本の國家の獨立を維持し之を發達せしめやうと思へば日本の國家の肉となり血となつて居る經濟を衰えないやうに發達さし、日本國民をして生活の安定を得せしめねばならぬのであります。近頃は思想問題として超國家的の考があります、日本の國家が何だ、そんな小さい事を考へなくとも宜しいではないか、世界は一である、日本が亞米利加の一州になつても構はぬではないか、日本國と言へば軍國主義である、軍國主義のやうな時代後れの國は無くても可いと云ふやうに申しますが、諸君にさう云ふ御考があるならば、物價調節も何も要らぬです、廉い亞米利加の品物を買つて行けば、それで宜しいです。併しさうは問屋が卸さない、レーニンの支配してゐる露西亞は如何でありますか、今露西亞は饑えて居ると聞きます、併し世界の何人が來て此の露西亞人を助けて居りますか、露西亞の主義は新しい主義でありませう、日本の新しい思想家の非常に憧憬して止まざる思想であります。併し其の人間が露西亞を助けて居りますか、英吉利と云ひ、亞米利加と云ひ、博愛の國であります、耶蘇教の國であります、而して其の同胞たる露西亞國民は今や饑えんとして居るのに、何人も鏗一文も出さないのでありますか、是は各國民が自分の國家を愛して他の國家の運命を顧みる遣が無い證據であります。超國家の思想は思想としては面白いけれども、日本に現實に之を行ふことは斷じて可かぬと思ひます。日本國は日本國民の基礎の上に立たねばならぬのであります故に、日本國民は日本國民自ら飯を食

はなければならぬ。それには日本國民は一旦興した事業は飽まで之を守り決して之を倒すやうなことなく、以て全体に經濟の發達を期せねばならぬのであります。今や我國は物價問題から病氣が起り、段々衰へ掛けて居るのであります。此時に際し、我々は國家主義、國民主義に依り、我日本國を愛し、我日本國民を愛し、又我々の子孫を愛すると云ふ考から、どうしても其病氣を癒して行かなければならぬ、日本の國家を立てゝ行き、今の病氣を癒やさんとせば實際問題として、物價を引下げると云ふ結論に到着せざることを得ないのであります。所で物價を下落せしむると云ふことは、前既に申したやうに、痛い事であり、物價が下ると景氣が好くない、儲からない、目前の利害に囚はれますと、物價を下げるのは可かぬと云ふことになるかも知れませぬが、物價を下げると云ふことは、現在の國民並に我々の子孫百年の事を考へるが爲めであり、唯々目前一寸痛いから、やらうとか止めやらうとか云ふ問題ではないのであります。日本國民が今此の物價引下をやらすに置いたら物價は永久に下がらないかと云ふに、それはそうであるまい、經濟の法則に依て、末路には物價は下がるに相違ありません。併し其下がる時は即ち事業が壊れて、到底恢復が出来ないと云ふ時であらうと思はれる、其時になつて物價が下つても何の役に立ちませぬ、物價が下ると云ふことの必要は、日本人に餘力があり、日本の産業が壊れない中に在るのであります、産業が一旦壊れたならば中々立ち難い。此の學校の建物にしても、壊してしまつたら中々立て難い、立つて居る中に修繕するのは易い事であり、それと同じ事で、まだ事業界の壊れる先き、日本人の懷中に金のある中でなければ物價引下が効能が無いのであります。それからもう一つ物價引下策に關聯して居るのは、戦後經營策であります。是は各國皆なやつて居りますが、戦後

經營は何てあるかと云ふと、天秤棒の戦争、經濟の戦争に於て勝を制せんことを旨とするのであります。經濟の戦争に於てどうして勝つことが出来るかと云ふと、それは至極簡單であります、物價を一番引下げたものが一番勝つのであります、米人も、英人も其他の歐羅巴の政治家も實業家も皆な此に目を着けて、戦後經營策を策して居るのであります。此事は日本の政治家にも實業家にも分つて居るのであります、而して此策をドン／＼實行して居るのは英吉利と亞米利加であります。それは昨日諸君に表で御示したやうに、英吉利、亞米利加に於ては既に物價が非常に下つて居ります、是には人間の努力が加はつて居るのであります。嘗て亞米利加の大實業家が日本へ來て、斯う云ふことを申しました、平和の戦争に勝つにはどうしたら宜しいか、それは簡單である、ウント物價を下げることである、そこで吾々は努力してウント物價を引き下げて見やうと思ふと、言つたのであります、此言空しからず、亞米利加人は實業家を先頭として、皆が物價引下に努力し、終に大々的に物價を引き下げたのであります。それで今日では實際亞米利加と日本は勢を異にして來た、日本は物價が高く輸入超過を續けてゐますが、亞米利加では、物價が安く輸出超過を續けてゐます、亞米利加國民は天然の富源を有つて、さうして非常な決斷を以て變に處し機に應じて働く所の恐るべき國民であるのです。斯う云ふやうな事をやる亞米利加は、實に世界に於ける最優者であるのであります。夫の華盛頓會議の如きも海軍を制限する爲めとして知られてゐますが、亞米利加では經濟的意味が重大であつた、即ち亞米利加は大戦の爲めに重い税をかけたゐた、其税を軽くせねば、物價も引下がらず、事業界も恢復が困難であるのであつた、そこで物價を引下げる精神で軍備縮小を企てたのであつた、是れも亦亞米利加が世界の平和戦争に勝を得やうとする

準備と見て可いのである。日本は亞米利加に引張られて、或る程度の海軍制限をなすことになりましたが、物價はまだ十分に下がり切らぬのであります。此の如くして日米の勢は非常に相違して來ました、亞米利加は平和戦争に勝つ所以として、軍備縮小を斷行し、物價引下を斷行したのであります。然るに日本は物價引下をやらない爲めに、開戦後得た金を段々吐出しつゝあるのであります、亞米利加は旭日の昇るが如く、此の世界的不景氣時代に於ても、輸出超過で金を得つゝあるのであります。斯様な勢では、我國は三大強國の一たる誇りも夢の間に消えてしまふのであります。之を要するに物價問題は日本に對する脅威である、此脅威を取り去らうとせば一時の痛みは我慢せねばならぬ、これに就ては或る特殊の階級の者が謀叛することを許してはならぬ、是は日本國民全体の大問題である、故に國民全体が十分の覺悟を以て物價引下を行ふと云ふのでなければならぬのであります。此根本問題が定まれば、次に如何なる方法に依つて物價を引き下ぐべきかと云ふことを考へねばならぬ、物價引下の方法に就ては色々な議論があつて新聞紙上にも謠はれて居ります。又現内閣も物價調節——物價引下に就ては、眞面目に之をやなうと考へて居るらしいですから何とか物になるかと思ふのであります、併し此際日本國民の心得が必要であると信じます。私が目錄に書きましたのは本年二三月の頃であつた。其時迄日本に行はれて居つた物價引下論を此所へ數へ擧げて居るのであります。是等の議論は皆な惡いと思ひます。物價引下の方法に就ては初めに物價の意味を申しました時に、一寸其話の本になる事を述べて置きましたが、物價と云ふものは物と金との睨合である、コップが拾錢だと云ふのは、コップ一個に對して拾錢と云ふ金で言

ひ表はして居る、物價を引下げると云ふのは、此の拾錢の物を八錢にする、七錢にするると云ふ事であるです。物價決定の原因が物の方面にも在り、金の方面にも在るですから物價引下にも、此の兩方面を考へなければならぬのであります。即ち金の方面から物價を引下げると云ふのと、物の方面から物價を引下げると云ふのとは自然分れて來ます。金の方より引下げると云ふことは、貨幣の分量を減することにあり、從て金融の問題になつて來るのであります。日本の社會に貨幣の分量が澤山になれば一つの物に對し從來貨幣を十割り當てゝあつたのは十二若は十五を割當てるやうになる。物價を引下げやうと思へば、貨幣の分量を少なくせねばならぬ、貨幣の分量が少くなれば一つの品物に對し、從來貨幣を十割り當てゝあつたのに、八割り當てることになつて來るのであります。それ故に物價引下策として、通貨を收縮すると云ふ考が起つて來るのであります。

それから通貨の收縮に關聯して、正貨を外國にドン／＼出してしまふと云ふ考が起つて來る、我國には正貨殆んど流通してゐない、その代り兌換券が流通してゐます、兌換券を正貨に代へ、其正貨を外國に出せば兌換券と云ふ通貨が減つて來るのであります、そこで其正貨を自由に出す方法を考へるやうになつたのであります。所謂金の輸出禁止を解くと云ふ論、金の輸出解禁の論は即ちそれでありませう。是等は貨幣の供給を少くする方法でありますが、次に貨幣の需要の方から云ふと、金利を上げると云ふ考が起る、金利引上は少くも物價を下げると云ふ一の方法になるのであります、此の方法は日本銀行の割引政策として現はれて來る、其の割引政策に依つて金利を引上げて以て投機熱を冷却し、投機を抑壓するのである、之を投機抑壓論といつて置きます。それから物の方から申しますと、物の供給がタップリ出

來れば物價が下ります、供給が少なければ物價が上ります。それに就て操業短縮問題、カルテル政策、それに關聯したものを加藤内閣が種々考へて居りますから、それを御話致します。それから物資の供給を滑かにして行く方法です、配給の制度、それに關聯して生産費を減する法、中間商業を少なくして行く方法、消費税を減免する方法、色々の事を御話致します。最後に物の需要を少なくすることを考へねばならぬ。需要が少なければ物價が下つて來ます、需要を抑へる方法は經費の節減であります、國費の節減なり、縣費の節減なり、町村費の節減なり、延ては國民の消費節約とならねばならぬ。さう云ふ順序で金の方面と物の方面の兩方から攻めて行かうと思ふのであります。

#### 一、通貨收縮論と其批判

先づ通貨收縮論、即ち金の分量を少なくすると云ふ論を調べて行きます、此論は随分廣く行はれて居ります、原内閣時分から議會の問題となつてゐます、物價調節と云ふと、通貨收縮に限られて居るかの如く、考へられてゐたのであります、此議論は既に諸君の耳に熟して居ると思ひます。そこで私は此の批評に入ります、私は先づ是等の通貨收縮論者に向つて、一体如何なる方法に依て通貨を收縮せんとするかと反問せねばならぬ。通貨を收縮しやうと云へば、通貨の膨脹する原因を除かなければなりません。今や日本銀行の兌換券は拾何億圓出て居る、戦争前には三億餘圓であつた、今日は戦争前の三倍以上も出て居る、通貨を收縮するといへば此兌換券を日本銀行に持つて行かなければならぬ、論者曰く拾億圓あるならば、四億圓を持つて行つて流通高を六億圓にすべきであると、然らばどうして持つて行くか、其方法としては只で持つて行くことも考へられる、例へば諸君が拾圓持つて居られるとすると、此の拾

圓の中から四圓、たゞ出して戴きたいと斯う云ふ註文を發するのである、其ときに、論君は之を承知せられるであらうか。此註文は人を馬鹿にして居る、四圓たりとも粒々辛苦の結果得た金である、それを物價調節の爲めにたゞで出せとは何事であるかと言つて、之を出す人間がある譯のものではない。たゞで出せと云ふのは租税である、租税を納めなければ息納處分になるから仕方なく出す、それも高いとか重いか摺つた揉んだで漸うく出すのである、日本國民は義勇奉公の念が強いけれども、租税を出すのに嬉しくて堪らぬと云ふ人間は無い、大抵は縣の税金も町の税金もイ、加減に御免蒙りたいと、蔭で言つて居りはせぬかと思ふのであります。それを物價調節の必要ありとして、我々の持つて居る兌換券を只で日本銀行へ出せといつては到底出来る相談ではない、國家は租税を強徴する、それを使はなかつたら國庫に残りますから、通貨の收縮になります、之と同時に民間に支拂つて行く、故に矢張通貨の收縮にならない。さうすると經濟上の取引關係で、通貨を收縮すると云ふより外に途が無い、さう云ふ取引は貸借と正貨の賣買であります、第一に日本銀行は銀行の銀行です、此邊の銀行は預金を集めて貸付資金とする、貸付資金に乏しければ、日本銀行に金を借りに行くのであります、日本銀行は普通の銀行に對し割引利率に依り日歩貳錢貳厘とか貳錢參厘とかで貸す、其貸す金として交附するのは、兌換券であります、これが兌換券の發行となるのである、普通銀行は兌換券で借りて之を又我々個人に貸して呉れる、段々兌換券が社會に流通して來る。それですから兌換券の收縮は、今まで借りて居つたのを日本銀行へ返して行くに依つて初て之を期することが出来る。日本銀行から借りた金を返へすには兌換券を以てする、それだけは日本銀行の金庫に納まるのである。原内閣の時分は通貨收縮論が矢筈ましかつた

が、其時は景氣が好くて日本國民は有項天になつてゐた、頻りに銀行から金を借りて思惑をした、金を貸さねば銀行を怨む、銀行にも金が乏しくなるから、日本銀行から借りることゝなつてゐた、是れは國民が通貨を膨脹させてゐたと謂ふべきである、政黨は通貨を收縮しろと叫んでゐたけれども日本國民は通貨を膨脹すべく努力して居つたのである、物價の調節せられなかつた所以である。

第二に兌換券の膨脹した大原因は輸出超過でありました、輸出超過となれば日本が金塊を受取る勘定になる、其金塊は造幣局に持つて行けば金貨に鑄造して貰へるが、そんな金貨を持つてゐても、實際の取引には用ゐられぬ、實際の取引には、兌換券が用ゐられ、兌換券は額面價格を維持してゐる、故に各人は國內取引では金塊や正貨を持つて居る必要が無い、偶々輸出に依つて金塊を受取つても、日本銀行に買つて貰ふて兌換券を受取ることになり、尤も是れは大抵爲替銀行を経ることになります、即ち爲替銀行が外國に對する債權を買ふ、其債權は金塊に代へられる、爲替銀行は、其債權なり又は金塊なりを日本銀行に賣り、日本銀行より兌換券を得て更に爲替手形を買ふ資金とするのである、此くして通貨が膨脹したのであつた。それ故に通貨の收縮をやらうと云ふならば、此兌換券膨脹の逆をやらねばならぬ、即ち日本銀行より正貨を拂下げて貰うことでもあります、正貨を拂下げて貰ふ代價として兌換券を日本銀行に拂ふ、それだけ兌換券が減るのである、勿論其正貨は之を社會に流通せしめないで金庫に藏つてしまふか、又は外國へ輸出するのでなければならぬ。斯ふ云ふ風に考へますと、通貨收縮論は、今日まで議論があつたけれども行はれなかつたのは偶然でない。金を借りたいと云ふ時代に於て、通貨の收縮は出來ない、又正貨を外國へ出す必要の無い時代に於て通貨の收縮は出來ない、正貨の拂下を請

求せないから兌換券を日本銀行へ提供する機會がないからであります。所で今や即ち如何と申しますに經濟上の自然の法則が茲に現はれて、通貨收縮は事實に於て行はれんとしつゝあります。それは即ち輸入超過であります。輸入超過があれば、取る金よりも拂ふ金が多くなる譯であるから、其差額だけは正貨で外國に拂はなければならぬ。そこで日本銀行に正貨の拂下を願はなければならぬことになる、是れ正貨が嘗て貳拾餘億圓あつたのに、今や拾八億餘圓になつて來た所以である。さう云ふ風になつて來たと云ふのは、それだけ兌換券を日本銀行に提供して正貨を貰ひ、其正貨を外國に拂つたからである。此の如く日本の貿易が逆調になつたので、事實に於て通貨收縮が、ポツ／＼力を現はして來たのであります故に此儘放棄して置く、日本は何時の間にか通貨が收縮して、學者政治家の希望する所の状態に達し物價が下るに相違ない、併し諸君が忘れてはならぬのは、其時分は日本の事業界は衰えて仕舞つた後となりはせんかと思ふ、段々金が外國に出て行つて、日本の國民經濟は衰えて行つた後でありましたやう論者は斯う云ふ風に日本の國が衰えて來ても、尙ほ通貨の收縮を希望するかどうか、一の疑問であります。

## 二、金輸出解禁論と其批判

次に之に關聯して、金の輸出解禁論を研究して見やうと思ひます、是は今日に於ては大分力を有つて居る議論であります、此の議論は今の通貨收縮論に能く似て居る、此様な時代に於て金を貯めて置く必要は無いから、金をドン／＼外國へ出すべしと云ふのである、金が出て行けば日本の貨幣は少なくなるから、物價が下ると云ふのである。併し金の輸出解禁を唱へて居る者は、種々な魂膽を持つて居るや



うである。是は一寸簡單には参りませぬ、其事を是から御話致します。一体此の金の輸出禁止と云ふものがどうして起つたか、其の解禁と云ふものがどうして起つたか、是は亞米利加に手本があるので、亞米利加が戦争以來經濟狀態の變動に伴つて、金の輸出がドン／＼盛んになつて來た時分に、自分の國を護る爲めに金の輸出禁止をやつた、日本は之に倣つて禁止をやつた、それが戦争が濟むと亞米利加は輸出解禁をやつたが、日本はそれをやらない。高橋前藏相は、金の輸出解禁をすれば金が乏しくなるから之を廢してはならぬと論じた、之に對して反對黨は盛んに攻撃したが、高橋前藏相は頑として動かかなかつた、是は非常な頑冥な議論のやうであります、併し根據は一通りあるのです。金の輸出禁止を解かないと云ふ根本思想は何であるかと云ふと、昔の重金主義や重商主義の唱へた如く、金は富であるから金を國內に集めなければならぬと云ふのではありませぬ。金のみが富ではないけれども、今日金を愛護せばならぬ理由がある。それは外でも無い、今日は信用經濟の世の中である、言葉を換へて言へば兌換銀行券制度が信用制度の中心に存してゐる、我々が拾圓の銀行券を拾圓として受取るのは、何時でも拾圓の金貨に換へられるからであります、若し拾圓の銀行券が拾圓の金貨に換へられなくなればたゞの紙であり、假令國家が之を紙幣として流通すべきものであると命令しても其命令には限界があります、故に其價は段々下つて行くに相違ありませぬ。殷鑑遠からず獨逸の馬克紙幣露西亞の留紙幣は如何でありますか、馬克は舊と四十七八錢のものであつたが、今は驚く勿れ七厘となり、六厘となり、五厘となつて居る。それは兌換銀行券が不換紙幣となり、信用制度の打壞れて仕舞つた結果であります、留の如きは反古同様であります。之に反して我々の持つて居る銀行券は五圓札にしる拾圓札にしる、同じく紙で

あるけれど、五圓で通用し拾圓で通用して居る、それと云ふも日本銀行の金庫の中に金貨が唸つて居るが故に我々は何時でも兌換券を此金貨に換へることが出来ることと云ふ確信を持つて居るからであります、私は戦争の初まる頃獨逸に居りましたが、獨逸を追拂はれて瑞西へ逃げて行きました、瑞西のチュリツヒで、銀行への兌換請求が殺到してゐるのを見ました、人民が早朝から銀行へ押掛けて列を成して待つてゐる、門が開くと潮の如き勢で這入つて行くのであつた、人心の機微は此くの如きものである、日本銀行の金庫に金が乏しくなると兌換制度の維持が出来ないことになるのであります。一体信用制度と云ふものが、大丈夫と思ふ信認の上に立つてゐる、而して其信認の基礎は正貨である、此の基礎を盤石の様にしやうとする爲めに、我々は金貨を愛護せざるを得ないのであります。其の金貨を愛護すると云ふ考が本になつて、戦時中金の輸出禁止と云ふ制度が出来たのであります。我國の此制度は米國に倣つたものである、所が米國は此制度を廢した、そこで日本にも之を廢すべしとの議論が行はれて來たのである。

所が米國が金の輸出解禁をしたのは、一は世界の金融中心市場とならんとする大野心から出てゐる、世界の金融中心市場とならんとせば、少くとも金の自由市場でなければならぬ、換言すれば金の出るのも自由、入るのも自由でなければならぬ、從來世界金融中心は倫敦でありました、英國は從來外國に澤山の金を貸して居つたから利子丈けでもウント入つて來る。トランスバールからは年々巨額の金が産出せられるから、金の自由市場とし金の輸出を放任して置いても少しも心配は無かつたのであります。所が戦争以來亞米利加が世界の債權國となり、段々英吉利の地位に代はらうとし、世界の金融の中心をも

倫敦から紐育へ移さうと考ふるに至つた、世界の金融の中心たるには金の自由市場たるを要するので亞米利加は多少の犠牲を顧みず、金の輸出禁止を解いたのであります。所が亞米利加では輸出超過が續いてゐるのであるから金の輸出禁止を解いても金は外國に流出せない、金を失つて仕舞ふ處は毛頭も無い日本と大に勢を異にする所である。日本では金の輸出禁止を解きましたならば、ドン／＼金が出て行つて、復た戻つて來ないかも知れない、それでありますから信用制度の維持論から云ふと、さう容易に金の輸出解禁を決行すべしと云ふ譯に行かぬ、現に戦争前のことを考へて見ると、身の毛もヨグツ様である、戦前には正貨が段々減つて行く、兌換制度の危機と迄いはれた、それと云ふも外國から募つた公債の利子丈けでも、壹億圓足らずのものを拂はなければならなかつた、而して其時に正貨の存在高は貳億餘圓に過ぎなかつた、正貨は一年の外國拂で其半分を無くしてしまふ譯でありました、そこで兌換券の基礎が崩れはせぬかと云ふ心配が起つたのであります。其當時お灸を据いられた者は忘れられない、高橋藏相の如きも其の一人であつたのであります。其の苦しいことが忘れられぬから、政府としても正貨を手離したくない、之を寶として自分の國內に蓄へて置きたいと云ふのである、茲に金の輸出解禁に賛成しない理由が在るのであります。

併しそれならば金の輸出禁止の制度の下に於て、日本の金は絶対に出不いかと云ふに、それはさうでありません、既に貳拾餘億金の、金が今十八億餘圓になつて居るではありませぬか、その理由は洵に明かであるです。前申しましたやうに、日本は現在に於て輸入超過であります、輸入超過と云ふのは買つた物が多いから、それだけ拂はなければならぬ、拂はなかつたら品物を賣つた外國が承知させぬ。

故に日本は金の輸出禁止をやつて居つても拂ふものは拂はなければならぬ。金の輸出禁止でも金を出さなければならぬならば金の輸出禁止論と金の輸出解禁論とは何所に違ひがあるかと云ふことになつて來ます。所がそこに少しの差がある、それは手心です、金の輸出禁止制度の下に於ては無暗に輸入する人に對し君は矢鱈に贅澤品を買つて來るが、それは止したらどうかと云ふ風に容喙することが出来る、輸入品の目録を作らして批判することが出来る、所が日本は物價が高いから贅澤品でも何でも買つて來る買つてしまつては今更拂はぬと云ふ譯に行きませぬから、そこで日本銀行に行きどうが金貨を拂下げて下さいと言つて願ひ出るのである、丁度自分の道樂息子がお茶屋遊びをしたと同じである、私の家では金貨は出さないと云ふ貼札を玄關に出して置くけれども、父たるものは最終に道樂息子の金を使つた尻拭ひをせずに居られぬのである。是は表面で言ふことと實際と違つて居る所であります。併し道樂息子の尻拭ひをせぬと聲明して、其遊興することを豫防する必要は無いといへないのであります。もう一つの問題は金の輸出禁止をして居る中に斯う云ふ事が起つて來る、品物の輸入超過となれば、輸入爲替が高くなる、而して金の輸送點を超えると、金を輸出して外國に支拂せんとするに至る、所が金の輸出は禁止せられてゐる、強て金を輸送せんとして正金銀行に行く、百圓の正貨は百四圓も出さなければならぬ、正金銀行から爲替を組むのと同じである。さうすると輸入商は外國より品物を安く買つたが支拂代金の調達の困難の爲めに、其品が高くなつたと同じことになる、是は輸入者に取つて忍ぶことが出来ない、そこで早く金の輸出禁止を解けと云ふ議論が起つて來るのである。若し又正金銀行を経ないで、日本銀行から直に輸入高に百圓を百圓で拂下げることにすれば、問題は起らないかも知れぬ、今や金

の輸出解禁運動は一番激しく輸入する人を中心としてゐる様であります。是等の人は一体日本の國家を愛して居るのであるか、或は自己の階級の輸入を調法にするが爲めにやつて居るのであるか、疑はれる譯である、今の政府は果して解禁をやるものであるかどうか分らぬ市來藏相の就任當時の御話では、たださう云ふ事には考が及ばない、漸次内閣の方針を決定すると云ふのであります。若し今金の輸入禁止の解除を断行し金は自由に外國へ出しても宜しいと云ふ風に引導を渡しますれば、輸入商は大手を振つてドン／＼輸入をやりはせぬかと思ふのであります。さうすると日本の金塊は加速度とは云ひませぬけれども、ドン／＼減つてしまひます、減るものならば寧ろ早く減して、金を無くして貧乏になる方がよいといはゞ、それは徹底した議論であります、金の輸出解禁をなし、外國品の安い物を皆な買つて内國品は買はぬことにし、内國製造業は一時倒れても可いと云ふならば、儘に一の荒療治になると云へるそれで國民が得心が行くならば、私は反對致しませぬ。併し此上商品の輸入を容易にし内地産業を倒し其後に新規蒔直して行けるものならば結構ですが、一旦産業が倒れると又起らぬかも知れぬ、さうなると儘に一の考ものであるまいかと思はれます。時間が來ましたから今日は是丈けに致して置きます。

### 三、外國放資論と其批判

昨日物價引下策として、通貨收縮論、それに引續きまして、その一つの適用論とも見らるべき、金輸解禁論の御話を致しました。今日は其の續で、矢張通貨收縮と云ふやうな根本觀念に基づいて、貨幣の分量を少なくすると云ふ考からそれに似たやうな方策に就てお話をいたします。それは外國放資論であります。是は今日まで相當に攻究もせられますし、又實際にも多少行はれたことがあります。外國放資

をすれば如何なる譯で通貨を收縮し物價を引き下ぐるに至るかと申しますと、外國へ貸す時分には、勿論日本の兌換券ではなく、正貨でなければなりません。それには正貨其物を向ふへ持つて行かねばならぬ、所がそれが日本の内地の通貨を收縮することになると云ふは、斯う云ふ譯である。先づ外國放資をしやうとせば、内地の人民から、興業債券なら興業債券と云ふやうなもので募るのであります、人民は兌換券を以て之に應募致します、其の兌換券を中央に集めて、それを正貨に引換へて、外國へ出すと云ふことになります。それでありますから外國へ放資すると云ふことで、さう云ふ方法を執りますれば、通貨の收縮は其の限度に於ては行はれ得るのであります。所が我國にては過去に於て外國放資論が盛んであります、而して之を實行したのであります、それは即ち寺内内閣の時代であります、寺内内閣は先づ隣國支那に向つて、金を貸すと云ふことを考へたのであります。それは今私の申しましたやうな手續に依て、幾口に分けたか知りませぬが、兎も角も凡そ壹億圓程のものを支那へ貸したのであります。所で此借款の結果はどうなつたかと云ふに、其後支那は財政頗る困難を告げたものであるから經濟借款と政治借款とをゴチャ／＼にし、多くは之を政治上に用ゐた、それであるから之を返すことが出来なくなつた、今日に於ては、利子さへも拂はぬのである。然るに他方に於いて興業債券で民間から借りて居る期限は満ちんとしてゐるのである、茲に行詰りを生じ、日本の金融界に一の難題が起つて居るのであります。さう云ふ實例に徴しても、外國へ金を貸すと云ふことは、言ひ易くして行ふことが中々難い。又我國は露西亞にも随分金を貸して居ります、殊に軍需品を賣つた代金を露西亞は拂はずに置いたものがあつた、例へば久原なら久原が銅を賣つて居る其の代金を拂はなかつた、久原は支拂を受けなければ

困まる、其他久原に準ずる會社や個人も澤山ありましたから、そこで政府は久原其他の露西亞の債權者に金を拂つて遣り、其代り政府自らが露西亞に對しての債權者となつたのであります。所が今日の露西亞政府は、中々金を拂ふどころでありませぬ金を拂はぬと宣言して居ります。此くして日本が金を貸したのは支那に於ても露西亞に於ても、皆な失敗の歴史を持つて居ります、唯だ佛蘭西其他に貸したものは、是れは貸倒れになりますまい。

然らば今日物價調節の爲めに外國へ放資するとして、支那や露西亞は禁物であります。歐羅巴の先進國へ金を貸すことが出来るかと云ふ問題になつて來ますが、それが仲々六ヶ敷い。今日では日本の金利が高くて、歐羅巴の先進國の方が安いのであります、金を貸すに利子の高からんことを欲する金貸の頭から云へば態々利子の安い所へ持つて行つて貸すと云ふことは考へられない、隨て先進國たる外國へ持つて行つて放資しやうと云つても出来ない相談となります。故に此の議論は、机の上では考へられますけれども、實際に於ては出来ない事であります。それで少し脱線しますが、私は之に關聯して御話をしたいと思ひます、と云ふのは今外國に放資したならば、日本の通貨を收縮して、物價を調節することが出来ること云ふ議論が行はれて居る最中に全然之と反對の運動が始まつて來た、日本にては金利が高いから金利の安い外國から金を借りやうと云ふ企てがそれでありました。今問題になつて居るのは日本の會社が外國に於て社債を起さうとしてゐることでありました。其の主なる例を挙げますと、南滿鐵道、川崎造船所杯であります、尙其他新聞紙上は現はれて居るのでも、相當に在る様であります。何故に外資輸入を企てるかと云ふと、彼等は日本の社債を持つて居る、其の社債の利子が高い、外國の安い利子の金を

借りて、高い利子付の内地社債を拂はうと云ふのが、其一でありませう。又會社財政の宜しくない所は借金をして旨く切抜けて行かうと云ふのが其一でありませう、安い金を外國から借りやうと云ふに至つては同じであります。之を我が日本の經濟界は何と見て居るでありませうか、物價調節の聲囂しき今日に方つて、外資を輸入すると云ふのであります、それはどう云ふ事になるかと云ふと、昨日も申しました通り、輸入超過で金は段々外國へ出て行くこととなる、それだけ金の穴が出来たから、此穴を借金を以て埋めやうとするのである、自分が儲けて穴を埋めるのではなく、散財した跡を借金で埋めると云ふことになるのである、之を物價の方から云へば外資を輸入すればそれだけ通貨を増すことになり、物價を下げないやうにすることに歸着するのであります。所が之を株主總會に諮りますと拍手喝采であります、新聞紙に載せられて之を怪まぬのであります。一方には物價引下を唱へ乍ら、他方には物價の下がない様の方法を實現せんとするのである、それを矛盾とも撞着とも考へないのであります、實に可笑しな事でありませう、若し物價を調節しやうと云ふ考があるならば、斷乎として外資輸入に反對せねばならぬ、又是等の會社が、外資輸入の許可を得んとして運動して來れば政府當局者たるものは斷乎として斥けなければならぬ。若し當局者がそれに靡くならば當局者の物價調節は不眞面目なものとなつて仕舞ふのであります。併し今度の内閣はそうでないかも知れませぬ、景氣は段々悪くなり、人民は次第に自覺して來つてありますから、外資輸入論は葬り去られるであらうと思ひます。今の私の見る所に依れば、外資輸入の計畫は、實はさう云ふ物價引下論から阻止せられるのでなく、實行上、行詰つて居ると思ふです。外國の中央銀行の金利はズット廉くなつて居りますので、一寸見れば安い金を借りられるかの如く

でありますけれども、借りるとすれば色々な手数料を取られ、其上に其の社債に對してはウント税が課かる。ウント税が課かるものには、安い金利で貸し得られぬことになるから、今外國で金を安く借りやうと思つて談判すると、ドッコイ高いものを借りねばならぬと云ふことになつて、實行上の障害が起り、外資輸入は出來ないやうになるだらうと思ひます。外資輸入は實行上出來ないと云ふことは、今日此際日本の國家に取つて、寧ろ慶すべき事であると思ひます。それで外國放資論と、それと反對に外資輸入論は是で打切つて置きます。

#### 四、投機抑制論と其批判

次には通貨を膨脹しないやうにして行く方法に移つて行きます。通貨は動もすれば増して行く傾がありますから、それを増して行かないやうに、方策を執ると云ふのであります。それは何であるかと云ふと、昨日も御話したやうに、銀行が貸付を制限する、貸すのを控へると云ふことであります。銀行より貸付を受ける者は、其金を如何に使ふかと云ふに或者は之を事業經營の爲めに使ひ、或者は之を投機の資金——思惑をする所の資本——として使ふのであります。事業を經營する爲めの資金は、銀行が之を供給するのが當然の事である、銀行の使命もそこにあるのであります。併し投機の資金を供給するに至つては漫に投機心を煽ることになるのである、戦争以來物價が騰貴して己まなかつた所の原因の一は投機心が飽まで煽られたからであります。故に此の貸付の制限と云ふ方法で投機を抑制しやうと云ふ議論が起るは當然である、是は相當權威を有つて居る議論で、近頃になつて此の議論が益々重要なものとなつたと思ふのであります。と申しますのは、今日までの歴史を見ますと、實際銀行の遣方も多少放漫の

誹を免れないやうであります、それが近頃になつてドン／＼現はれて來たです。論より證據、臺灣銀行や朝鮮銀行が放漫なる貸付を遣つて居つたことが新聞にも載つてゐます、何でも投機師や其他確實な事業をせぬ者に迄も巨額の金を貸してあつた様であります、其金が中々返らぬことになつたから大變下あります。そこで近頃斯ういふ特殊銀行をして貸付の制限を爲さしめなければならぬ、特殊銀行を充分監督せねばならぬと云ふ議論が起つて來たのであります、加藤内閣の物價調節策の一項としても此事が新聞に出て居りました。特殊銀行を監督し、特殊銀行の貸付を制限すると云ふことは實際必要であると思ひます。勿論特殊銀行も今日では、自分の悪かつたことを自覺して居りますから、是から後ちに放漫な貸付を止めることになるだらうと思ひます、放漫な貸付をせぬことになれば、自然投機資金が充分に供給されぬことになるのであります。尙一步を進めて考ふれば、放漫な貸付は獨り特殊銀行に限つてゐなかつた、普通銀行も、此の放漫な貸付をして居つた、即ち投機に使ふ資金を充分供給して居つたのであります。隨て實際多くの人が取引してゐるのは此の普通銀行でありますから、普通銀行をして貸付を制限せしむると云ふことが、實際必要となつて來るのであります。所が普通銀行は營業を自分勝手にして居りますから、政府が餘り干渉する譯に行かない、そこで普通銀行の親方銀行をして監督せしむることが必要となつて來る。親方銀行といへば日本銀行であります、日本銀行が普通銀行への貸付に就て手心をするこゝならねばならぬ。詰まり普通銀行は、イザ金が必要と云ふ場合には日本銀行へ金を借りに行くのであります、金を借りに行つた時に、昨日も申した通り兌換券を出して貸すのですから、それが兌換券の増發となる譯です。それですから日本銀行は普通銀行の咽喉首を押へる

ことが出来る、それは外でも無い、日本銀行の割引政策に依るのであります。勿論割引政策の外に日本銀行から普通の銀行と話合をして、成るべく投機資金を供給せぬやうにしたら宜しいと云ふことも懇談することもあつたと聞き及んでゐます。併し唯たさう云ふ一片の懇談では十分でない、利害問題を以て之に蒞む必要があるのである、即ち金利を高くすると云ふことである、金利が高ければ、日本銀行へ借りに行つても、割がよくないと云ふことになり借りることを差し控へます、日本銀行の一番の武器は此金利政策であります。而して今日金を貸すのは手形の割引と云い形に依るのが普通でありますから、其の金利政策割引政策と云ふのである、此くして日本銀行は此割引政策に依て、一國の金融を自由に動かすのであります。従つて日本銀行の割引政策は、物價調節に就て重要な意義を有つて居ります。若し政府が金融界に對して何等かの政策を行はうとするならば、それは日本銀行を介して行くのであります、今の藏相が加藤内閣組織の當初に於て新聞記者に語られた話の中に、「日本銀行が大藏省に從屬して居るやうな考では可かぬ、日本銀行は獨立經營をしたが宜しい」と言はれたと傳へられて居る、私はそれを疑つたのであります、果せる哉今日さういふ事實が實現せられて來ませぬ。國家が政策を行ふには、日本銀行を抱込んで、種々の手段を講せしめなければならぬのであります。割引政策も國家の政策として之を日本銀行に行はしめねばならぬのであります、従つて日本銀行と大藏省は、どうしても遠ざかることが出来ないと思ふのであります。

以上私は日本銀行の金利を相當に上げると云ふことが従つて少くとも金利を下げないと云ふことが、物價を下げる一の方法であると云ふことを明にしました、之に就ては民間の議論と對照しなければなら

ぬのであります。日本銀行は大正八年の秋に二度金利を上げて、それから後は置放してあります。所で歐羅巴の中央銀行の金利を見るに戰爭中に段々上つたが、戰爭から後ち下げて來た、英蘭銀行が金利を下げた、亞米利加に於ては準備銀行——少し日本とは組織が違つて、幾個かの銀行が寄つて準備銀行を成して居ります——が金利を下げたのであります。そこで我國の實業家や政治家の中には歐米諸國の中央銀行が金利を下げたから、日本銀行も必ずや金利を下げるであらうと考へ、又爾かせねばならぬと主張する者が出て來たのであります。所で元來金利と物價は逆比例するもので、金利が下れば物價は上り、金利が上れば物價は下るのであります。殊に有價證券には最も強くさう響くのであります、蓋し金利が下がると云ふのは、金貨が貸し出されると云ふことである、其廉い金を借りて社債券なり公債證券なり株券なりを買ふやうになると、どうしても是等の有價證券が上る譯であります、そこで有價證券の買思惑をなす人にあつては金利が下ると云ふことが非常な福音となるのである、而して我國民は戰爭中に買思惑をすることを教育せられて來た、又銀行の金利が下がつて買思惑に成功した經驗をも持つてゐる。日本銀行が金利を下げると云ふことになれば、其聲だけでも投機心を唆るに充分であります。而して其結果は相場を引き上げることになります、さう云ふ國民を相手にして、日本銀行たるものは輕々しく金利を下げる譯に行かぬのであらうと思はれます。是れ今日まで日本銀行は金利を下げるに定まつて居ると人が言ふに拘らず、其實行が現はれぬ所以であります。成程今日に於て金利の高いことは、實業家に取つて都合悪いかも知れませぬけれども、物價調節の上から見れば、日本銀行が金利を下げるのは宜しくないと思ふのであります。日本銀行が今後如何なる態度を執るか私敢て知りませぬが、眞面目に物

價引下を考へて居るならば、斯う云ふ事は出来ない、少くとも金利は下げないで、或る時期の間は押し通して行くものと信じます、又私はさうあらんことを希望するのであります。これは國家の政策であり中央銀行の政策でありますが、一体物價を調節しやうと思ふならば、此割引政策の外に、人民の投機心を抑へて行くことを考へて行かねばならぬと思ひます。それに就て私は暫く時間を拜借して、投機が如何に日本の物價を煽り、如何に日本の財界を悪くしたかと云ふことを、もう一度繰返して御話したいと思ひます。

此間も御話しましたやうに、戦争以來物價の騰貴は世界の大勢であるから、買つて置けば必ず儲かると云ふので買思惑が盛んになり投機心が蔓つて來たのであります、それが爲めに物價は上げなくても宜しいものを故らに上げた、それは大正八年の終りから大正九年の初め狂亂時代に於て最も激しかった、それが大正九年三四月の恐慌を起す動機となつた、若し投機があれ程盛に行はれてゐなかつたならば、恐慌もあれ程激しくは無かつたであらうと思はれます。それから次に大正十年の四月から中間景氣が起つたのは何故であるかと云ふと、種々の原因もあらうが、其中の一つは投機であつたのであります、多少物價が上り掛けた其の勢に乗じて買思惑をやつた者があつて、物價を益々上げたのであります、併し景氣が根本から恢復したのではなかつたから、反落の來るのは當然であつた、其反落の爲めに二進も三進も行けない様になつたものは夥しいものであつた。さう云ふ例は東京なり、大阪なり、神戸なり、繁華な都會には澤山あると思ふです。私を見る所に依れば、大正九年の恐慌よりは、大正十年の中間景氣に乗せられて投機的に行動して九俣の谷に墜ちた者の方がモット多いやうに思ひます。此の如くにして没落

して行くのは、皆な投機と云ふ病氣が原因になつて居るのであります。過去の歴史は此の如くである、將來も投機をやる以上は、矢張同じやうな結果に陥ると思はねばなりません、一体山氣は誰れにでもあると云ひますが、今日の投機病は日本國中に瀰蔓して居ります。而して投機を遣ると申しましても多くは買思惑であります、素人には買思惑をすることが難かしい、買思惑と云ふのは、將來高くなると思ひ買つて置いて、高くなつたときにそれを賣るのであります、此買思惑をなす爲めに銀行から金を借りるのである、今まで御話した通り、戦争以來物價がドン／＼上つて行つたから買思惑は中つたです、所が大正九年四月から反落期に入り、年々歳々輸入超過を續け、正貨は段々出て行き、通貨收縮の勢が成り、物價も漸次下らんとして居るに際し、買思惑をやつたら、失敗するに相違ない、是は經濟の理法から言つて分り切つた事であるです。所が一旦買思惑と云ふ病氣に罹つた人間は、戦争當時のやうに買つて置けば儲かると一圖に考へてゐる、是は非常な間違であります、近頃投機をやつてゐる者は少ない、是は大勢に反對して居るからであります。斯う云ふ時世になつたら買思惑をやる方が大勢に順應するかも知れませぬ、所が買思惑は素人には中々出來るものではありません。賣思惑は先きを賣るのであります、今よりは來月が廉い、更に再來月が廉くなるに相違ないから、今の高い時に賣つて置かうと云ふのです、品物の無いのに賣つて置くこと云ふことは出來ないから、そこで是はどうしても定期でやらなければならぬ、定期が三ヶ月であるならば、今の直段が標準になつて三ヶ月の後の直段が出来ますから、三ヶ月の後を賣つて置き、其の實際に直段が下るのを待ち之を買ひ戻すのであります。それで買思惑は取引所を應用せねば出來ないことになり、取引所には玄人が居つて中々素人には金を儲けさせない。仲買人

と云ふやうな者は、田舎の人間が來ると初め一度や二度は勝たして金を儲けさすかも知れませぬ、さうすると田舎の者は手を拱いて金儲が出來ると云ふので、一目散にやつて來る、それを待受けて二重三重に負かして、金を取り上げて仕舞ひます、デすから投機の玄人は田舎の人間が投機に頭を突込んだら、必ず賽錢を上げて行くものと考へて居る、詰り投機市場は玄人が玩具にして居る、それを田舎の人間が獨りで分つたかの如くやるから、非常に失敗を招くのであります。併し私は素人ばかり咎めませぬ、玄人は素人がお賽錢を奉納に來るといつて高く留まつてゐますが、其玄人であつても成功すると許り限りませぬ。私は新聞紙上で諸君の御承知の事を例に取つて御話致します、それは何であるかと云ふと、近頃ゐらい波瀾を捲起した石井一件であります。石井とは何者であるか、大阪の一の投機師であります、實は材木屋が本職であつたさうですが、投機に手を染めて一方の將軍となりまして非常な勢力を振つて居ました、此石井がどう云ふ事をしたかと云ふと、彼は米取引所に出動し盛に買つて買ひまくり、終に五十萬石の米を受取るやうな芝居を打つた、米一石參拾圓にしても千五百萬圓となるが、その大金を耳を揃いて出したのであつた、是は普通の投機師には出來ぬ事でありませぬから、世間の人は吃驚したのであります。彼れはそれ丈けの度胸を持つて居つたから、兎に角一時は世を靡かしたです。次には株式取引所に出動し、鐘淵紡績會社の新株の買ひにかゝつた、それで鐘新は大正十年の末から十一年の初へ掛けてドン／＼上つて止まないことになつた、田舎の人は之に倣つて買つたです、それに引摺られて他の株券の價も上つて來たのです。所が日本の輸出入の關係はどうなつたかと云ふと、私が今日まで述べた所に依つても知らるゝ如く、輸入がドン／＼超過する、殊に本年の一月二月三月の如きは、一月に壹億

圓に手の届くやうな輸入超過があつた、これは金がドン／＼無くなる徴候に外ならぬ、此の如く金のなくなる勢の現はれて來てゐる時に、人爲を以つて株の價を上げやうとしたのであつた、彼れは俺れの力を以つて天下は動くものと考へた。成程一時は動いたですけれども、所詮天下の大勢に抗することが出來ない筈である、現に大正九年の三四月の恐慌でもさうでは無かつたか、銀行の金庫に金が無くなつて來たときに、皆人は買思惑に耽つた、それで彼様な急轉直下の芝居を演ずることになつたのでは無いか經濟の理窟から言ふと、金が無くなる趨勢があらはれた時に、物を買つて上げるのは逆行である。石井某が如何に玄人でも、天下の大勢に逆行して成功する理由は無い筈である、果せる哉投機界の奇傑も一敗地に塗れて復起つことが出來なくなつた。一時は石井はそれ丈け金を持つて居るか測り知れぬと思はれた、愈々失敗した後から見ると、彼の銀行からも金を借り、此の銀行からも金を借りてゐる、其數が五十何行に上ばつてゐる、さう云ふ手段で遣つたか知りませぬが、一つの銀行で多くは參百萬圓乃至四百萬圓の貸してゐるのがある、さうして見れば、五十幾つかの銀行が石井に投機資金を供給したことになる、すから實は銀行が石井某の背後に居つて、大勢に逆行する投機をやらしたとも云へます。其の天罰立ろに到つて銀行の混亂名狀すべからざることになりました、銀行の方から石井の破産宣告を請求することになつた。或る銀行の如きは支店長が無暗に石井に金を貸したと云ふ廉で、其支店長を告訴してゐるのもあります、漫に石井某を嗤ふ勿れ、銀行が寄つて集つて其投機を助けたではありませぬか又石井某を嗤ふ勿れ、石井某を中心として、天下幾分の小投機師甚しきは田舎のお百姓迄が買思惑に熱中して居つたではありませぬか。之を以ても天下の大勢推して知るべしで、日本國民が今日如何に投機



に憧憬して居るか云ふことが分るのであります。併し投機は没落する道行である、何と云ふ日本國民の信念でありませう。大正九年三月までが物價が騰貴する時代で買思惑をやつて来た、それが血となり肉となつて忘れられない。よく言ふことであります、何時も柳の下に鱈は居ないのであるのに、日本國民は一寸物價が上ると、買思惑で必ず儲かると思ふてゐる、それであるからどうしても物價引下の大業を成就することが出来ない、日本銀行が割引政策に依つて多少投機を抑制し、物價引下に貢献するかも知れませぬが、それよりも根本に歸つて國民が投機をやめると云ふことになつて來ねばならぬ、と思ふのであります。尙進んで云へば投機の流行することを攻めると云ふことは、或る枝葉の問題に走つて居るのかも知れませぬ。實際今日の思想界を見るに其場々で景氣の好い、人氣の好いやうな新しい思想を歓迎してゐるやうである、自由戀愛論、利那主義、それが道義に反しやうが、人の妻を乗取らうが構はない。皆人はさう云ふことを書いた雑誌を飲んで讀み、さう云ふことを書いた新聞を飲んで讀む、それが經濟の方に現はれて、濡手で粟の擱取り、眞面目に勤勉努力して富を致すよりも、一寸思惑をやつて旨く金を儲けやうと云ふ考になつて來るのであります。教育の目的は人格を完成するに在ると云ひますが、今日の教育者の中には、新しい思想に囚はれて居るものがありはせぬか、小學校の教育は健全であると思ひますが、併し今日の思想界は、必ずしもさうでないと思ふのであります。私は今物價調節策として投機を抑へるの必要を感じてゐるものであります、投機を抑へると云ふことは、日本銀行の金利引上杯では充分でない、フツ／＼してゐる國民をもう少し落付かせて、眞面目に仕事をする方に向はしめなければならぬのであります。物價調節策から思想問題に入りましたが、是は教育家諸君に

も考へて貰ひたいと思ひます、是れで投機抑制論を済ましまして、次の問題に移ります。

##### 五、カルテル撤廢論と其批判

今度は物の方面から物價を引下げる方法であります。既に前に述べました通り物の直段は需要供給に依て定まるのであります、其の原理を眞理なりとするならば、物の供給が多くなれば物價が下る、物が不足になれば、物價が上る譯であります。だから物價を下げやうとするならば、第一に物の供給分量を澤山にすることが必要となつて來ます。所が今日、實際行はれて居る所を見るに、却て品物の供給を制限する方法が講せられて居ります、是が故に物價の引下をなさんとせば、先づ供給制限策を打ち破つて行かねばならぬ。それに就て此間物價變動の歴史を述べました時分の事を此に引用致しますが、それはカルテル政策であります。その一つは操業短縮であります、操業短縮は品物を澤山拵へないで置いて物價を下げないと思ふことになりません。是は大正九年三月四月のやうな大恐慌の時に、自ら救ふ所の方法としては許さねばなりません、所が自ら救ふと云ふ窮境を脱した後、更に大に儲けやうとして、其製品を品不足の状態に置かうとするに至つては之を批難せねばならぬ、そこで政府も今日盛に行はれてゐる操業短縮を監督し、不當に物價を下げないやうに力を効して居るものに對しては其操業短縮を止めます方法を講ずることが必要であると思ひます。是は政府の力ばかりでは行きませぬ、輿論の力に頼らなければならぬのであります、昨日も申しました通り、紡績會社が嘗て操短をやつて、それに依て自分を救うたのみならず、其後になつて大變金を儲けて居つた時分に、色々喧ましく非難したです、社會全体が非難しますと、それを止めるのです。デすから是は上に其人があつて監督する必要があると同時に

一体の日本國民が不當の操業短縮を非難すると云ふ輿論を起すことが必要であると思ひます、此操業短縮と同じやうな考から出で、目下我國には所謂價格カルテルと申すものが行はれてゐる、それは同業者が相場を維持する爲めに賣値を協定することであり、此方法も亦藥となり毒となるものであります。物價が非常に下つて、當業者が皆な將棋倒しに倒れると云ふ場合に於て、彼等が團結して相場を此れより下げない云ふ協定をなすのは、自ら救ふ方法として之を許さねばなりません、所がさうでなく同業組合なら同業組合と云ふ一の組織を利用して物の値段を下げないで、高く賣つて自分の階級丈儲けやうとする者が現はれて來るのであります。卸賣は安くなつてゐるのに、小賣商が相團結して小賣直段を下げない如きは、其一例であります。是れ亦政府の監督せねばならぬことでもあります。加藤内閣の物價調節策の中にも之が出て居るのであります。不正組合の監督と云ふのは即ちそれであり、同業組合は必ずしも悉く不正ではありませんが、中には其の組合を利用して、不正にも物價を下げないで置いて獨り儲けやうとする者もあるのである、それは明に今日の時世の要求に反してゐる、之が監督を必要とする所以であります。政府當局者が漫に干渉して當業者の團結を打壊はすのは可くませぬが、左りとて團結を利用して時勢に逆行して物價の下落に反抗しやうとする者あらば、之を直して行くことが必要であると思ひます。加藤内閣がこれだけ此策を實行するか知りませぬけれども、思付は確に正しいと思ふのであります。之を實行すると云ふことになれば中央政府の問題に止まらず、延て地方廳の問題になるのではなからうかと思ふのであります。よく申すことではありますが、小賣成金と云ふ者があります、物價下落と云ふ趨勢が現はれ卸賣は段々下つて居るのに、小賣が少しも下らぬと云ふのは、買ふ方にも

罪はありますけれども、賣る方にも、直段を下げないと云ふ努力があるかと思ふのであります。

#### 六、中間商業除去論と其批判

次は供給を旨く調節して行くこと云ふ考から起つた方法に移つて行きます、それは生産者と消費者との關係を旨く付けると云ふことでもあります。物が或る地方に澤山有つても、それが他の地方へ行かなかつたならば、其の後の地方から云へば物不足となります。之を調節せんが爲めに、色々物價引下策が考へられて居ります。此の方面に於ける物價調節策は、原内閣の時にも考へられて居りましたし、今の内閣に於ても考へて居ります、此の講演要項の中に中間商業除去論と云ふてゐるのは其一つであります、生産者が物を拵へて、直ぐ消費する所へ行くなら宜しいですが、此中へ澤山の者が入れば入る程、それが利益を得なければならぬから、最後の消費者は高い物を買ふ譯になります。そこで中間商業を少くして行くこと云ふ考が起るのであります、物價を引下げる方法としては理窟のある事であり、前々原内閣の時分から高橋内閣へ移つて、物價調節策と云ふのは大抵之を考へて居つたのであります。かの公設市場を設ける、と云ふ案は其一つであります、百姓が大根や蕪を中間の商賣人を抜きにして其市場へ持つて行きて、大根や蕪を買はうと云ふ人も其市場に行つて直ちに買ふのであるから、廉い物が買へる譯であります、そこで此の公設市場の設置を非常に奨励したのであります。デ此の公設市場は旨く行はれたならば、儘に物を下げる働を爲すものであります。然るにそれが今日迄充分其働をなしてゐないのは如何なる譯であるかと云ふと、それは公共團體等の設立者側に於て當を得ない所があるでしやうが國民にも罪があると謂はなければならぬ。東京で聞いた所に依りますと、公設市場を如何に利用するかと

申しますと、大家の内儀さんや官吏の奥さんが自分から公設市場へ行つて大根や蕪を買ふのであれば、安く買へる譯である。所がそんな所へ行くのは自分の品位を墜すと云ふ考から、電話を掛けて品物を取寄せる、さうすると持つて来る丈の費用が要るから、矢張公設市場も廉くないと云ふことになる。元來公設市場は物を安く賣らうと云ふ趣旨で設けられたものであるのに、奥さん方は廉くなくてもよいと云ふのですから堪らない。私は獨逸で長い間留學して居りましたが、獨逸の婦人の市場通ひに感心しました、大概の婦人は食事前に、籠を肩へ掛け、市場に行つて肉とか、麵麩とか、野菜物とかを買つて来るのであります、所が日本でそんな事をすると、ケチな奥さんだと言つて笑はれます、それで電話を掛けて品物を取寄せるのでありまじやう。公設市場の制度は設けられてもそれを利用しないのであるから駄目です。日本國民は物價調節を口にする丈で、高い物を買つて平氣で居るのであります。加藤内閣は前内閣の考を襲ひまして、六大都市に中央公設市場を拵へるとか、或は公設市場を監督して行くとか申して居ります。併し國民が自覺せぬと成功せぬかと思はれます、公設市場は市が經營したり府が經營したりしてゐますが、市會議員や府會議員が寄つて集つて、ア、せい斯うせいと自分の都合の好いことばかり言ひ、中には商品の仕入の際に商人と結托するのもあつて旨く行かないのである、從來公設市場が成功せなかつたのは、良家の奥さん方が利用の方法を誤つたに因ると同時に議員さん連の公設市場に對する態度が當を失してゐたのにも因るのであります、此くして物價を調節せねばならぬと言つて居る先生方が、物價を調節することに反對の行動を執つて居ることになるのであります。そこで加藤内閣は是等の議員さんを監督し併せて公設市場を監督せんと言つて居るですが、旨く行きましたならば洵に

結構であります。一休こんな事はデモクラシーで遣つて行かねばならぬ、それが官僚の監督を受けると云ふのであるから餘り感心した話ではないのであります。併し今日の日本のデモクラシーは、悲しい哉さう云ふ状態に在ると思ひます。

#### 七、配給調節論と其批判

次には配給を圓滑にする方法が考へられて居ります、其第一の方法は冷蔵庫や冷蔵船を造ることです。此邊は漁港ですから實際此問題に就て利害關係があると思ひます、魚類が獲れても、それを其の土地丈けで食ふのは馬鹿氣て居る、冷蔵庫なり冷蔵船の設備が出来ますと今日獲れた魚類を何日迄も腐らせないで、置くことが出来、又之を魚類の不足して居る所へ送ることが出来る、從て其處の魚類の價を安くするのである、是れは必ずしも魚類に限りませぬ、夏は何でも腐敗します、其腐敗を防ぐことが出来ると、物の配給が好くなつて來て、物價を下げることになるのであります。現内閣はさういふ設備を爲す者に補助金を與へたり或は低利資金を貸してやると言つて居ります。さう云ふものを段々拵へると云ふことは確に好い事でありませぬ。

第二は運輸問題であります、鐵道や汽船に於て荷物を遠方へ送る時分に、貨車をよこして呉れなかつたり、汽船の船腹を充分に提供されなかつたりしては、品物が他の地方へ行かないから他の地方から云ふと品不足で物が高くなる。品物の配給をよくするには、貨車なり船腹なりを充分に提供しなければならぬ、是も加藤内閣は考へて居ります。此政策は實行の出来る事でありませぬ、是は物價調節の爲めに必要なるばかりではありませぬ、いつの時代に於ても爾がせねばならぬが、殊に今日に於ては必要であ

ると思ひます。

其次は運賃を低減することであり、總て品物の價は、我々が消費する時分に至ると、運賃も籠まつて來てゐる、故に運賃が廉くなると云ふことは、物價が下ると云ふことになるのであります。

鐵道は、今日、大体に於て國有となつて居りますから、政府が自分決心すれば運賃を下げる事が出來ます。汽船に就ては、政府が補助金を與へて居るのがあります、其補助金を與へて居る會社に對しては、政府は命令權を有つて居りますから、汽船の運賃を下げしむることが出來やうと思ひます。現に今の内閣は此點に向つて歩を進めやうとしてゐる様であります、殊に生活必需品の運賃を廉くしやうと云ふのであります、是は結構な事で、實行出來る事であると思ひます。

斯う云ふやうな事が段々實行されれば、物價を多少なりとも下げて行くことが出來ると思ひます併し唯々茲に問題となるのは、配給を好くし、運賃を下げて最後の消費者へ行く前に、小賣商が物を廉くせず依然として高く賣つては物價引下策は行はれませぬ。そこで政府は不正組合を監督するが上に不正商人をも取締らうとして居ります。是は中々難い事であり、如何なる不正な事をやつて居るか警察官が臨んで視ることになるかも知れませぬけれども、是は到底旨く出來ないと思ひます。併し官廳が中に入ると云ふこと、民衆が斯う云ふ事に就て一の意見を持つと云ふことになれば、物價調節に對する輿論が起つて來、而して一方にさう云ふ配給の制度を好くして、ウンと廉くすると云ふことが起つたならば、最後の小賣商が自分丈けの懷中を肥して居る譯に行かぬと思ひます。さう云ふ風に天下の大勢が動いて來ますと、此の方法も物價を調節する策になると思ふのであります。

#### 八、消費税廢減論と其批判

尙ほ之に關聯して、政府では消費税を廢すとか減ずるとか云ふことを考へてゐるやうであります、是が旨く行はれたら一の方法であります。先づ第一に生活必需品の輸入税を減免すると云ふのであります。次には織物消費税を低減すると云ふのであります、織物消費税の低減は税制整理に關して居ります、果して税制整理が行はれるかどうか豫測し難い、税制整理が行はれるとせば、織物消費税、殊に木綿の消費税を低減することが必要である、現在に於ては絹を着る人も木綿を着る人も一割の税を負担して居ります、之を改めて木綿を着る人間に廉く税を課けると云ふことになれば、最低生活費を減することになるのであります、併し私は税制整理の實行を危みます。次に醬油税を廢止すると云ふことが新聞に謠はれて居ります。私も餘程以前から之を唱へて居るのであります。醬油は人間として生活するに必ず要る物であります、之を廢すれば生活費を減することになります、日本では醬油税の收入は餘り澤山ありませぬから、之を廢して財政上の打撃とならぬと思ひます。それから次は石油税の廢止であります。石油消費税廢止は随分以前より喧ましい問題であります、是は廢止しても、財政上の痛みは無いのであります。何故なれば電燈の普及に従ふて燈火用としての石油の消費は段々少なくなつて居るからであります。そこで政府は石油消費税は何時でも廢すると言つて居るのであります。兎に角斯う云ふ風に一つの方法で物價の調節を圖るに非ずして、色々の方法を以て物價を調節するのであります、それが集まれば多少の威力を生ずるものであると思ひます。

#### 九、國費節減論と其批判

それから最後に物の需要と云ふ方面を考へますと、物價を下げるには物の需要を減せねばならぬ。我々が何でも彼でも買へば物價が高いのである、故に物を買はうと云ふ考を、少し抑へて行くと云ふことであります。是は私は物價調節に就て、相當な威力を持つものであると思ひます。物の需要を減して行くこと云ふには、一つは政府の方で考へなければならず、一つは人民が考へなければなりません。政府の方で考へると云ふのは政府自身が儉約をして行くこと云ふことであります。私は此點に就ては此頃隨分議論をして居りまして、雑誌の上でも意見を公表して居りますが是は財政を緊縮すると云ふ事になります。尙ほ具體的に言ふと、國費を節減すると云ふ事でありませぬ。併し國費と云ふも中央政府ばかりでなく、地方團體も同様でなければならぬ。國であつても地方團體であつても、使ふ所が少なくなつたならば問題はありませぬ。所が今日では中央政府なり地方團體なりが年々使つて居る金は、實に莫大なものであります。それでありませぬから、それだけ物の需要者となつて、經濟市場に現はれて來るのであります。今日日本の國家はどの位の消費者であるかを見るに、年々の費す金高は十四五億圓であります、大正十年の豫算は十五億八千萬圓、大正十一年の豫算は十四億八千萬圓であります、併しそれは一般會計のみであります、特別會計を含んで居りませぬ。勿論國の消費と云ふならば、特別會計も考へなければならぬです。現に鐵道の如きはウンと費用を使つて居ります、大臣もあり、次官もあり、局長もあります。が是等の人の俸給は、特別會計で賄なつてゐますから、此の拾四億八千萬圓の中に入つて居りませぬ。其他鐵道は驛長から驛夫に至る迄皆な月給を拂つて居ります、石炭を焚いて居ります、そう云ふ費用は此中にありませぬ。そればかりではなく大學や高等學校の費用は、拾四億八千萬圓の中に少しは出てゐ

るが、其外に尙存して居ります。さう云ふ風な特別會計が澤山あります、印刷局、專賣局、造幣局も特別會計であります、製鐵所も特別會計、陸軍の砲兵工廠も特別會計、陸軍の製絨所も特別會計、朝鮮總督府、臺灣總督府、關東州、樺太、南洋廳等も皆な特別會計であります、特別會計は三十幾個あります。それが皆な一般會計の外に立つてあります、此一般會計と特別會計とを皆合して見ると重複するものがあります、其重複を差引いて、一ヶ年に何程日本政府が金を使つて居るかを見るに、私の計算に依ると貳拾八九億圓で、一寸參拾億圓に手が届くのであります、先づザット一般會計の約倍位のものとなるのであります、此の如く日本の政府は毎年約參拾億圓の金を使つて居る、それだけの購買力を有つて居る譯であります。隨て物價を下げやうとしても、政府が之を支へてゐることも見ることが出來ます。それと同様に地方團體に於ても非常に經費が増加して來ました、戰爭前には全体で參億圓前後であつたが大正十年の地方費は總計拾億圓程であります大正十一年度の地方費は恐らくは拾貳億圓内外になるであらうと思ひます。さうすると國家の一般會計を拾四五億圓として、其の一般會計を標準にして言ふならば地方費が一般會計に肉薄して居り特別會計も亦一般會計に劣らないと云ふ有様であります、此くして驚く勿れ今日の日本に於ては、國家公共團體の使ふ金は約四拾億圓と云ふことです。此四拾億圓が購買力となつて現はれて居るのであるから物價を支える力は十分にありといはねばならぬ。今や之に氣が付いて國費制限の聲が起つたのであります。政府も非常な決心を示して、自分節約を守ると切り出したのであります。大藏大臣は二割五分の天引を主張して居ると云ふことであります、一体天引と云ふ事は、財政整理の方からいへば宜しいことと思ひますけれども、之を嚴に行へば不公平のことが起ります、例へば文

部省の豫算は從來尙に見じめなものであります。之に反して陸軍海軍の豫算は實に豊富なものでありま  
す。私はさう云ふことをい、加減に言ふのではありませぬ、豫算の研究が自分の職業であります。斯う  
云ふことを言ふと陸海軍の人は怒るかも知れませぬけれども、實際其通りであります。それで今  
天引で以て二割五分減となつたならば、文部省費を於ては教育上己むに己まれぬ經費までも削らなけれ  
ばならぬことになる、是が日本の今日の時勢の要求する所なりや否や甚だ疑はしいのであります、デ  
すから天引論は動もする人を誤るさいはねばなりません。若し文部省は一割しか引くことは出来ぬが、  
他の省に於て三割も四割も引けるものがあつて、平均二割五分を引くと云ふのであるならば、大藏大臣  
の志は實に壯なりといはねばならぬ。併ながら此の國費を制限すると云ふことは、制限される方から見  
れば非常に痛いですが、自分のやらんとする仕事が出来ないのであります、只今日の日本の國狀に鑑み、  
國費の制限をなさずにと置く、經濟上の打撃で段々國力が衰へて行つてしまいます、それを考へると、  
今國費の制限は苦しくても忍んで行かなければならぬ、物の輕重を考へて、茲に斷乎として國費を制限  
すると云ふことに出で來なければならぬ、それには輿論が之を援けてやらなければならぬ。今私は政治  
論をして居るのではありませぬ、此の政黨が悪い、彼の政黨が良いと云ふ偏頗なことを申すのではな  
い、私は公平に日本國家の今日要求して居る所を露骨に言ひ、物價調節の必要あり、國家も經費を節減  
する必要があると云ふのであります、此國費節減に就ては如何なる政黨も之を是認すべきである。日本  
國民は皆な擧つて、政府が國費を節減せんとしてゐるのを援けねばならぬ、何も私は加藤内閣を謳歌し  
ては居るのではありません、憲政會の内閣が起つても、政友會の内閣が起つても、苟も國費を節減する



ものであつたならば、是は事の性質上賛成すべきものであると云ふのであります。今は豫算編成時期でありますから今後どう云ふ風に決定しますか分らぬ。或は二割五分の天引が一割の節減になるかも知れませぬ、さうなるは物價引下の効果は少なくなるであらう、それでも節減を爲さざるよりは宜しい。國家に於てそれ以上は國家の經費節減に關することでありませんが、之と同様に地方費も亦減して行かなければならぬ、新潟縣に於ても縣費を節約すると云ふことが、或は時勢の要求かも知れませぬ、岩船町に於ても町費を節減すると云ふことが、時勢の要求であるかも知れませぬ。今日新聞紙で見ると依りますと、地方官會議で現内閣が地方官に訓示して居る所では、地方費を節減せよと云ふ項目がある、現内閣も確に之に重きを置いて居るやうであります。故に地方廳に於ても冗費を省いて、苦しい所を我慢して行かなければならぬと思ひます。國費節減の項目、地方費節減の項目に就ても私は意見を持つてゐますが時間がないから省いて置きます。

#### 一〇、消費節約と其批判

私は消費節約論を最後に掲げて置きましたが、是は物價調節の上に非常な威力を有つて居ると思ひます。近頃消費節約論が起つて參りました。私は京都に居りまして、關西の商業會議所の方とも相談し、消費節約運動を起すべく大に盡力致しました、所が今日まで反響が少なかつたのであります。戦争が了つてから後ち、間もないことでありましたが、英吉利の大宰相ロイドジョージは、國民が無駄な費用を使ふといふことは可かぬ、宜しく無駄をせぬと云ふ同盟（アンチウエーストユニオン）を組織し、國民が擧て儉約して、英吉利の國家を興して行くべきであると英國國民に警告した、此聲が非常な反響を持ち

英人は直に無駄せぬ會を組織し、大に儉約の風を發揮したと云ふことでもあります。所が日本に於てもそれと同じ必要がある、關西の商業會議所は無駄せぬ會を組織した、併し新聞も端しに少しか書いて呉れない、景氣の好い、新思想の流行して居る時に當つて此の如き見すばらしい企は、國民に何等の反響を與へなかつたのであります。所が段々不景氣が現はれて來るに従つて、此の「無駄せぬ會」とか、或は儉約論とか、或は消費節約論とか云ふものが、新聞にも多少書かれるやうになり、人の耳にも入るやうになつて來たのであります。そこで政府に於ても消費節約を宣傳すると云ふことになり、農商務省の案もありますし、内務省の案もあると云ふ風で大分實際に於て考へるやうになつたやうであります。けれども政府のやる所は宣傳に過ぎない。眞に儉約の實を擧げるのは民衆の自覺に待たなければならぬ。故に今日の時勢に於て最も必要な事は、民衆が消費を節約し、無駄な金を使はぬと云ふ覺悟を定めて行くことでもあります。此中には教育者も居られることと思ひますが、國民を導いて、儉約をするやうに一の輿論を拵へることに盡力して貰ひたい。儉約をせざる所の者、濫りに贅澤をして人に示さうと云ふ人間は、如何に資力ありと雖も、現代の要求を解せざる人、時代錯誤の人間であると思つて行く様な輿論が出来ましたならば、それは物價調節に相當な効果を生ずるであらうと思ひます。所が案外今日はさうでありません、戦争の副産物として残つて居ります、流行を逐ふて行かうといふ華美な風が蔓つて居ります、其の中心は東京であります、東京と云ふ所は文化の中心であります、政治の中心であります、豪い方の集つて居る所であります。所が其中に流れてゐる空氣は至極不健全であります、殊に消費經濟に向つては、間違つて居ると思ふ點があります。それは何かと云ふと、東京人は經濟の理法に適はない事を

して居る、と云ふのは物は廉い所で買ふと云ふのが理法であるに拘らず、東京人は高い物を買ふ風があるのであります。東京人は何所へ行つて物を買ふかと云ふと、三越へ行つて買ひます、三越の物は高いものとしてあります、其高い所で物を買はなければ品格が保てないやうに考へてゐるのである、例へば進物を贈るとします、三越で買はなければ人が歡ばない、三越ならば高いから立派な物をよこしたとするのであります、此くして東京民は同じ物であつても、高くあつたら買はうと云ふ様な氣前を持つてゐます、そこに奢侈の風が流れてゐるのであります。私は今日、日本人が米のみ食ふのを贅澤と思つてゐます、日本人は尙少し麥飯を食はねばならぬと思ひます、米ばかり食つて麥を食はぬから米の値段が高いに比し麥の値段は馬鹿に廉いのであります、そこで私は日本國民にもう少し麥飯を食はしたいと思つて運動して居ります、が、それが中々人の耳に入りませぬ。所が麥の臭い所を取捨てる方法が發明せられました、如何に麥の嫌ひな臭いも、其麥ならば食へると申します、是ならば宜しい、之を宣傳しやうと考へてゐる、そこで、それには東京を乗取らなければならぬ、東京人が麥を食ふと言つたら田舎の人間も食ふことにならうから、東京を攻落さうと考へた。偕て然らば如何にして東京の人に麥を食はすかと云ふことに苦心して居つた、所で農商務省の人が其宣傳の方法を教へて呉れた。それに依ると東京で麥を廉く賣つたら東京人は食はない、どうして高く賣るに限る、又普通の穀物屋では可かぬから三越で賣らせるに限る。三越で麥が賣れたら、東京人が麥を食ふやうになると斯う云ふのであります、是は實に東京人の心理を穿つて居ると思ひます。東京人は高くせないと買はぬと云ふのであります、エライ氣前であります、それは儘に時勢に逆行してゐます、然るにそれを地方の人迄が眞似するのであります

す、それで我國の財界が今のやうな窮境に陥つたのであります。東京では嫁入道具に見えを張るさうです、中産の人で娘を二三人持つて破産すると迄言はれてゐます、親が破産して娘を嫁入らす、何と云ふ皮肉でありませう。所が儉約して筆筒はやらぬが、娘丈け貰つて呉れと言つたら、婿さんドコツイ御免蒙りますと逃げてしまいます、そこで可愛い娘を嫁入りさすには、自分が借金しても仕方がないことになり、息子は中學校へやらなくても、娘は女學校へやる、何故なれば女學校を卒業しないと嫁入さすことが六ヶ敷くなるからであります、所が東京人を笑つては可かぬ、田舎にもさう云ふ見得を飾る人があるのであります、是が我國民經濟を段々衰へしむることになる一因であります。若し諸君が私の言つた例を笑ふならば、それは新潟縣にはさう云ふ事の無いと云ふ証據になる、それならば、どうが東京人や他の府縣の人を同化するやうに宣傳して貰ひたいと思ふのであります。私は此點に就て色々意見を持つて居りますけれども、時間がないから是で止めます、兎に角消費節約は今日に於て一番必要であると思ひます。尙ほ之に關聯して、各人が自分の懐に金を持つて居ると消費して仕舞ふから、之を中央に集めて行かうと云ふ案が考へられてゐる、其一は郵便貯金の利子を引上げると云ふ案であります、各人が利子の高いのに誘はれて、金を使はないで郵便貯金に預ける様になつて來ることを期してゐるのであります。次には簡易保險に入ること勸誘する案であります、簡易保險は一の強制貯金とも見るべきものであります。第三は小額公債を募るの案であります、勸業債券と同じやうな、割増券を小額公債にも附やうと云ふこと迄考へられてゐる、小額公債を買つて置く貯金と同じことになる、それ丈けの金が自分の手許に無いから儉約することになるのである。現内閣も此點に意を注ぎ、斯う云ふ方法で人民に

儉約をさせるやうに考へて居ります、是も出來ますならば、私は相當効果のあるものと思ひます。

## 第五、結 論

尙ほ述べたい事も澤山ありますけれども、物價調節の筋道は大体是で御話したと思ひます、加藤内閣のやらうとして居る所の政策にも大抵觸れました、其政策の中には實行の出來ないものもあると思ひますけれども、又中には相當に効果を生すべきものもあると思ひます。斯う云ふものが寄つて集つて來ると私は物價調節も效を奏することになりはせぬかと思ひます。世に通貨收縮論がありますが、貸付を制限し或は貸付けたものが返つて來たら、再び貸さないと思ひます。世に通貨收縮論がありますが、貸付を制限し、尤も金を外國へドシ／＼輸出することになれば、通貨の收縮は現實に於て段々行はれて來るだらうと思ひます。併しそれは他方に又大なる憂を残すことになり、日本の國民としては投機熱を抑へると同時に節約をなし、國家も地方廳も經費を節減することが肝要であります、斯う云ふ風に調子が合つて行きましたならば、或は物價は下つて來るかと思ひます、又さう云ふ風にならんことを希望するのであります。デ物價調節は政府の考にも依りますけれども、又日本銀行と云ふ中央銀行の考にも依りますけれども、半分は人民の考に依るのであります、人民に物價調節の誠意が無くては旨く行かぬのであります。人民の誠意は消費節約になつて現はれます、若し人民に此誠意が無かつたならば吾々は何所へ行くことになるか云ふと、ト、の詰り墳墓に向つて行くのです。事業は倒れて仕舞つて又起すに由

なく、民衆は生活に苦しみて、爲す所を知らぬと云ふことになり、世界の迷兒になつてしまふ外ないのであります。若しそれがイヤならば、今日此際國民が充分な覺悟を以て物價調節に努めて、目前の苦しみのを忍びて行かねばならぬ。擇ふべきは此の二つであります。日本國民は此の孰れを擇ふでありましか、日本の五千五百萬の同胞の中には此の取捨に迷ふてゐるものがあるかも知れぬが、私は今日に於て最早取捨に迷ふべきでないと思ふのであります、私が今日まで述べた所に就て諸君が多少共鳴せられますならば、乞ふ隗より始めよ、實行の出来る事を行つて貰ひたいと思ふのであります。さうしたならば諸君の周圍からして彼の奢侈をする者を非難し、彼の儉約をする者を褒める様に輿論が起るでありましか、此くして一郷を動かし、一郡を動かし、一縣を動かして行つたならば、天下響の如く應じて、物價の調節が出来るであらうと思ひます。どうか諸君に於て、若し此點に就て眞理があると思はるゝならば直ちに實行して貰ひたいのであります。長い間分りませぬ事を申して恐縮に堪へませぬ、然るにも拘らず非常に多數の御聴衆が靜肅に御聴取り下さいまして、洵に光榮の至りに存します。

大正十二年二月一日印刷  
大正十二年二月五日發行

〔非賣品〕

編者 新潟市西大畑町六〇一番地  
 兼行 越佐教育雜誌社  
 代表者 宮 林 裕  
 印刷者 新潟市東堀前通九番町 高 橋 ル イ  
 印刷所 新潟市東堀前通九番町 高 橋 活 版 所  
 發行所 越佐教育雜誌社



なく、民衆は生活に苦しみて、爲す所を知らぬと云ふことになり、世界の迷兒になつてしまふ外ないのであります。若しそれがイヤならば、今日此際國民が充分な覺悟を以て物價調節に努めて、目前の苦しみのを忍びて行かねばならぬ。擇ふべきは此の二つであります。日本國民は此の孰れを擇ふでありましか、日本の五千五百萬の同胞の中には此の取捨に迷ふてゐるものがあるかも知れぬが、私は今日に於て最早取捨に迷ふべきでないと思ふのであります。私が今日まで述べた所に就て諸君が多少共鳴せられますならば、乞ふ隗より始めよ、實行の出来る事を行つて貰ひたいと思ふのであります。さうしたならば諸君の周圍からして彼の奢侈をする者を非難し、彼の儉約をする者を褒める様に輿論が起るでありまして、此くして一郷を動かし、一郡を動かし、一縣を動かし行つたならば、天下響の如く應じて、物價の調節が出来るであらうと思ひます。どうか諸君に於て、若し此點に就て眞理があると思はるゝならば直ちに實行して貰ひたいのであります。長い間分りませぬ事を申して恐縮に堪へませぬ、然るにも拘らず非常に多數の御聴衆が靜肅に御聴取り下さいまして、洵に光榮の至りに存じます。

大正十二年二月一日印刷  
大正十二年二月五日發行

〔非賣品〕

編輯者兼 發行所 新潟市西大畑町六〇一番地  
代表者 越佐教育雜誌社  
印刷者 宮 林 裕  
印刷所 新潟市東堀前通九番町 高橋ルイ  
發行所 新潟市東堀前通九番町 高橋活版所  
越佐教育雜誌社



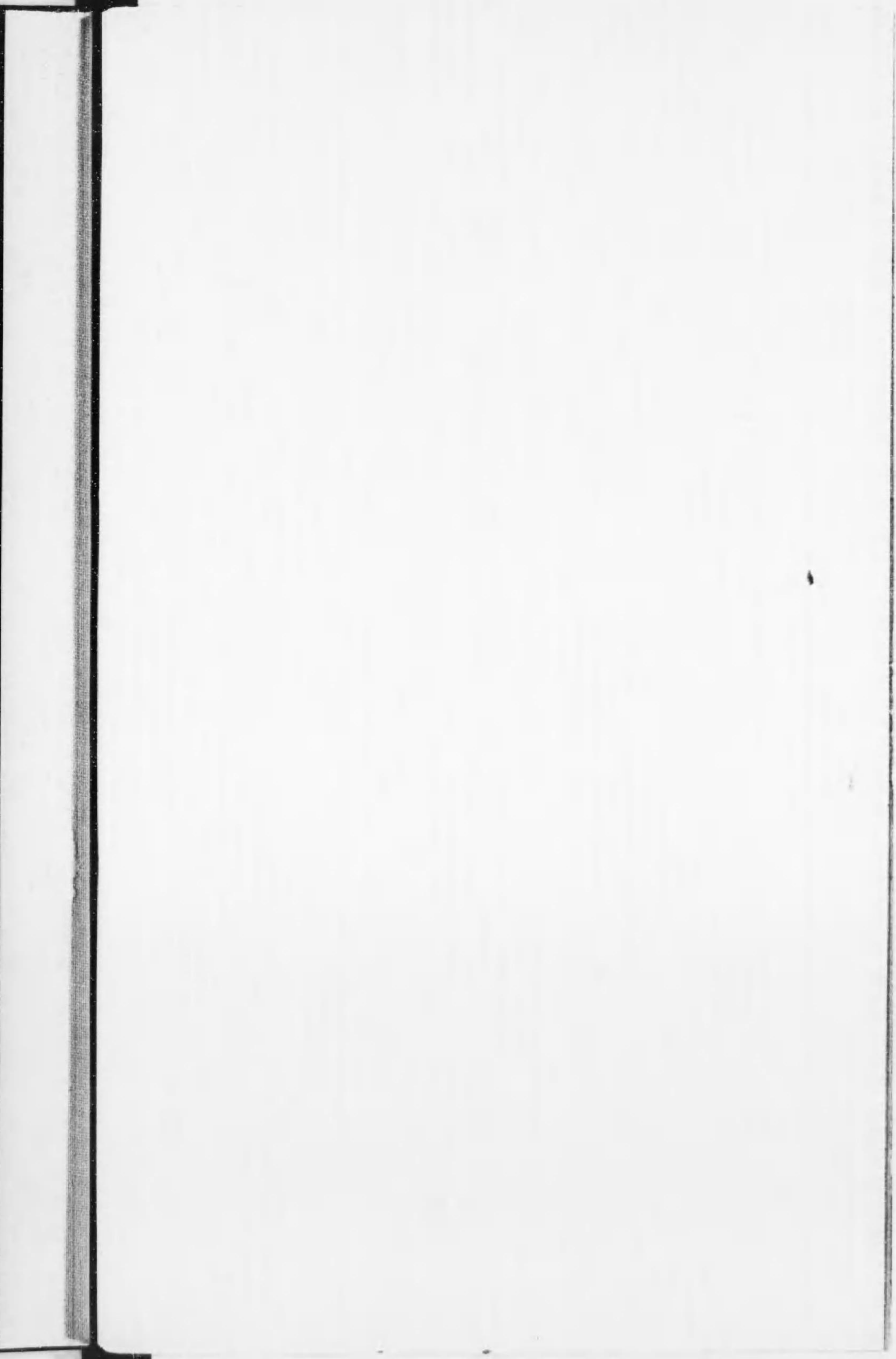
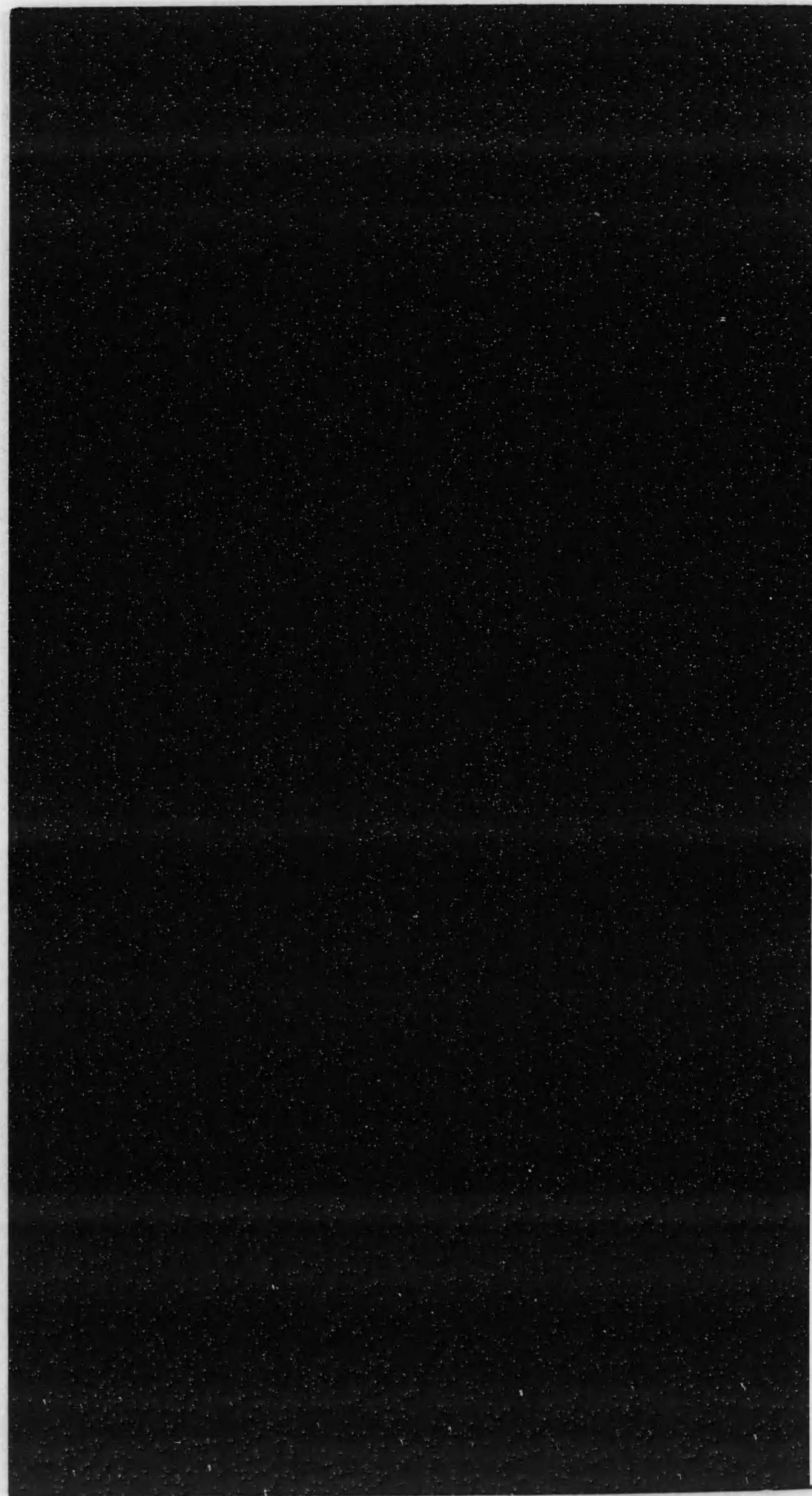
なく、民衆は生活に苦しみて、爲す所を知らぬと云ふことになり、世界の迷兒になつてしまふ外ないのであります。若しそれがイヤならば、今日此際國民が充分な覺悟を以て物價調節に努めて、目前の苦しいのを忍びて行かねばならぬ。擇ふべきは此の二つであります。日本國民は此の孰れを擇ふでありましか、日本の五千五百萬の同胞の中には此の取捨に迷ふてゐるものがあるかも知れぬが、私は今日に於て最早取捨に迷ふべきでないと思ふのであります、私が今日まで述べた所に就て諸君が多少共鳴せられますならば、乞ふ隗より始めよ、實行の出来る事を行つて貰ひたいと思ふのであります。さうしたならば諸君の周圍からして彼の奢侈をする者を非難し、彼の儉約をする者を褒める様に輿論が起るでありましかやう、此くして一郷を動かし、一郡を動かし、一縣を動かし行つたならば、天下響の如く應じて、物價の調節が出来るであらうと思ひます。どうか諸君に於て、若し此點に就て眞理があると思はるゝならば直ちに實行して貰ひたいのであります。長い間分りませぬ事を申して恐縮に堪へませぬ、然るにも拘らず非常に多數の御聽衆が靜肅に御聽取り下さいまして、洵に光榮の至りに存します。

大正十二年二月一日印刷  
大正十二年二月五日發行

〔非賣品〕

編輯者兼 發行者	新潟市西大畑町六〇一番地 越佐教育雜誌社
代表者	宮 林 裕
印刷者	新潟市東堀前通九番町 高 橋 一
印刷所	新潟市東堀前通九番町 高 橋 活版所
發行所	越佐教育雜誌社

508  
18



終